



No.447

発行 社団法人名古屋工業会
(名古屋工業大学全学同窓会)
〒466-0062 名古屋市昭和区狭間町4
TEL・052-731-0780
FAX・052-732-5298
E-MAIL・gokiso@lime.ocn.ne.jp
<http://www.nagoya-kogyokai.jp/>

社団法人名古屋工業会会誌

ごきそ

2012 5-6 月号

【式 辞】

平成23年度学位記授与式 学長式辞

平成23年度名古屋工業会賞贈呈式 理事長挨拶

平成24年度入学式 学長式辞

【OB講演会】学生就職支援事業

ものづくりは楽しい

めざそうエンジニア—翔けよう輝く未来へ—

【交流コーナー】

現在の形の名工大の御器所キャンパスへの統合に至る舞台裏

【ごきそホットライン】

表彰者紹介

【学生コーナー】

社会人基礎力育成グランプリ2012決勝大会進出

【学内ニュース】

情報基盤システムがリニューアル! 他

【情報ネットワーク】

支部報告・会員ニュース

パズル



東京支部「東京ごきそサロン」開催のご案内

第49回「東京ごきそサロン」は大盛況であった前回例会での提案どおり「原子力事故と今後のエネルギーについて第2弾」をテーマとして企画しましたので会員各位のご参加をお待ちしています。

開催日時：平成24年6月13日（水）18時30分～20時30分

開催場所：八重洲倶楽部（東京駅八重洲口地下） 電話：03-3275-0801

テーマ：「原子力事故と今後のエネルギーについて第2弾」

講師：織田 満之（おだ みつゆき）氏（E39卒）

昭和39年日本原子力発電(株)入社。東海発電所（ガス炉）、敦賀発電所1号機（沸騰水型）、2号機（加圧水型）、高速炉もんじゅ等の建設、技術、運転、保全、設計改良、発電所管理などに従事。発電本部部长、理事、関係会社の常務を歴任。平成20年に退任後は原子力学会、保全学会等で活動中。

講演概要：昨年3月の東電福島第1原発事故発生から1年3ヶ月、前回例会から6ヶ月が経過しました。今回はその後政府の委員会や民間事故調査委員会などから報告が発表されています。それ等の中での電源系統の問題点、非常用冷却系の問題点、格納容器の健全性の問題点などについて織田氏に解説していただきます。それに加え、前回例会で時間の関係で受付できなかった本テーマ全般に関する質問にお答えいただく時間を設けます。ご質問のある方はあらかじめ5月23日（土）迄に下記の三山までメールあるいはFAXでご連絡ください。数件程度のご質問に織田氏より解説していただきます。

会費：1,000円（懇親食代）

申込先：食事の準備の都合上、6月6日（水）までに下記の各科常任幹事宛、電話、FAX又はe-mailでお申し込み下さい。各科常任幹事は出席者名簿を6月9日(土)までに三山まで E-mail (miyama@asahibond.co.jp) あるいはFAX (03-3972-4583) によりご連絡下さい。

C原田：Tel 03-3535-1579
e-mail: tatsuji.harada@toda.co.jp

A小松：Tel 03-5461-1695
Fax 03-5769-1915
e-mail: komatsu.nobuharu@obayashi.co.jp

M北野：Tel/Fax 045-822-3293
e-mail: y-kitano@c3-net.ne.jp

E加藤：Tel/Fax 029-273-5506
e-mail: kato.katsuhide@sound.ocn.ne.jp

D三山：Tel 03-3972-4909
Fax 03-3972-4583
e-mail: miyama@asahibond.co.jp

W飯田：Tel/Fax 03-3688-1961
e-mail: imas-hi@cameo.plala.or.jp

Y日沖：Tel 03-3347-7512
Fax 03-3347-7548

e-mail: hioki3@y6.dion.ne.jp

K阪井：Tel/Fax 0468-03-5850
e-mail: rensaka@iis.u-tokyo.ac.jp

F嶋：Tel 0466-83-9490
Fax 0466-82-9239

e-mail: shima.shohei@ebara.com

B濱野：Tel 042-795-0641
e-mail: k-hamano@h01.itscom.net

Es平手：Tel/Fax 045-321-7626
e-mail: hirate@nifty.com

Ⓚ北野：Tel/Fax 03-3467-5739

表紙写真説明

「潤う頃！」(尾瀬)

梅雨前後の草木は、潤い生き生きとして、生命力を感じます。

みなさんも、新緑のシャワーを浴びてみて下さい。

撮影者 安村隆志 (W①)

平成23年度 学位記授与式

平成23年度学位記授与式が、3月23日(金)の10時30分から名古屋市公会堂大ホールで挙行され、卒業生及び保護者等多数の方が参加した。

式典は、高橋学長以下大学の役員、工業会の篠田理事長等が出席し、管弦楽団の奏楽で開会、大学院博士後期課程修了者34名、論文提出者3名、博士前期課程修了者665名、第一

部卒業生904名、第二部卒業生129名に学長から学位記が授与された。引き続き学長式辞があり、各代表から答辞が述べられた。

その後、名古屋工業会賞の授与が行われ、篠田理事長から第一部、第二部の成績優秀な卒業生22名に賞状と記念品が授与され、理事長の挨拶の後合唱団の学歌合唱をもって学位記授与式を終了した。





平成23年度学位記授与式

学長式辞

国立大学法人名古屋工業大学

学長 高橋 実

式辞を述べる前に、東日本大震災について一言申し上げます。震災発生後、早や1年が経ちました。国民一丸となつての復旧・復興は未だ途上にあります。各人・各団体の忍耐と奮闘は素晴らしく、日本として誇るべきとともに本学としても可能な限りの支援を続けてまいります。

本日、博士37名、修士665名、学士1,033名に対して学位を授与しました。合計1,735人中、留学生は98人、社会人は57人です。名古屋工業大学を代表して激励の言葉を申し上げます。

本学は、明治38年に中部地域初の官立であり、また全国で4番目の高等工業教育機関となる名古屋高等工業学校として創立され、今日に至るまで7万人を超える優れた人材を輩出し、我が国の産業社会の基盤を築き、その繁栄を支えてきました。充実した実践教育により育てられた人材は、産業界、大学・研究機関、官公庁などで素晴らしい活躍をされています。皆さんには、本年1月1日付けで制定した「名古屋工業大学憲章」で謳っているように、「工学を礎に新たな学術・技術を創成し世界を変革することのできる先導的な人材」として、平和で幸福な未来社会の実現に向けて邁進されることを期待します。

さて総務省データによれば、日本の総人口は2050年には約1億人前後となり、15歳～64歳で定義される生産年齢人口は1995年の8,717万人をピークに、2050年にはその約60%の5,389万人に減少すると予測されています。2050年はおよそ40年後であり、将来の定年年齢がどうなるか分かりませんが、おそらく皆さんの多くが退職を迎える頃を意味します。所謂少子化・超高齢化が目前に迫っています。このような時代が到来する中で、皆さんは何を考えるでしょうか。大きくは二つに分かれるでしょう。一つの考え方は労働人口の減少を食い止めることであ

り、出生者数の増加あるいは女性、高齢者、外国人など労働対象者層の拡大と定着の方策です。別の考えは、減少を受け止めた上で、新しい日本のものづくり、社会づくりを模索することです。高付加価値のものづくりは異論の無いところかと思いますが、その他にも一人当たりの生産性の向上、エネルギー・資源消費の少ないものづくり、最初からの海外における労働選択、物量的基準だけに基かない幸せな暮らしの指標づくりなど国内生産規模の維持と異なる価値観です。どの様な道を我が国が選択するのか不透明ですが、おそらく正しい選択、間違った選択ということではなく、多様な道が提示された上で選んだ道をしっかりと進めてゆくことが問われるでしょう。いずれにしても、豊かな活力ある社会を実現するためには社会イノベーションが必要であり、工学がその力を発揮できる道です。

以上述べたように日本が典型的ですが、先進諸国における少子高齢化の急激な進行の一方、地球規模では人口爆発の世紀に入っており、国連人口基金の“世界人口白書2010”に拠れば、アジア・アフリカを中心に毎秒当たり二人から三人増え続け、2050年には現在の約70億人から約92億人に達すると推測され、食糧、エネルギー、各種資源などの確保や温暖化対策は大変な困難に直面します。このような状況を考えれ



ば、ただ日本を見るだけでなく常に地球的・世界的視野を持った対応が問われます。

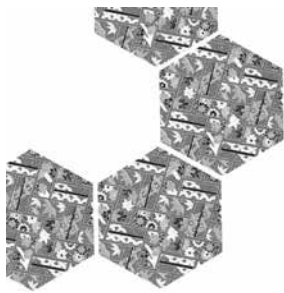
何か、これらの困難の解決を皆さんだけに押し付けるように聞こえるかもしれませんが、大学としてもこれらの課題解決に向けて取り組んでいます。昨年末の日本経済新聞の報道に拠れば、東海・北陸の主要65大学を対象としたアンケート調査において「地域産業に貢献している」の項目で名古屋工業大学がトップです。言うまでもなく東海地域の「地域産業」は大企業のみならず中小企業もグローバル展開をしています。本学は、グローバル化を常に意識し、本学の強みである意思決定のスピードの早さと教育研究体制の機動性・融通性を活かし、国内外のトップレベルの大学・研究機関との連携を推進し、持続可能社会の構築に貢献したいと考えています。昨年から今年に掛けての具体的取り組みとして、「高度防災工学センター」「次世代自動車工学教育研究センター」「窒化物半導体マルチビジネス創生センター」「コミュニティ創成教育研究センター」の四つのセンターを新たに立ち上げ又は準備しているところであり、自然災害、輸送機器、エネルギー、そして超高齢社会に関する研究を推進しています。東日本大震災からの復興は喫緊の課題ですが、本学はこのことを念頭に置きつつ大きく日本再生あるいは人類社会の発展というフレームで真摯にイノベーションに取り組んで参ります。皆さんには社会に出てからもこれらのセンターを含めて本学とコンタクトを取り続けて頂き、共に課題解決に向けて歩み続けることをお願いします。今年の卒業生、修了生の中で博士号を取得した71歳の方がおられます。私共と産学共同研究を重ねる中、学問としての工学に目覚め博士研究に挑みました。皆さんも、何歳になろうとも本学に戻って新しい研究を通じた自己研鑽・成長の機会があることを頭の隅に入れてください。なお、今年度卒業生からは生涯メールアドレスを付与しますので、是非とも本学情報の収集にも活用頂ければ幸いです。

ところで、私の世代への「団塊世代」と同様に皆さんも「ゆとり教育世代」あるいは「ゆとり世代」と呼ばれ続けられるかもしれません。

残念ながら、「ゆとり世代」の言葉が使われるときには、「基礎学力が足りない」「他人に無関心」「年長者とのコミュニケーション力が下手」など皆さんにとっては謂れの無い誹謗が含まれているかと思います。所詮、多様な能力や価値観を持つ個人の集まりを一纏めに性格付けする評論家やマスコミのラベル貼りには無理があります。しかし、矛盾するようですが、同世代には社会的状況が反映された特徴がある程度見られることも確かです。私どもの世代から見れば、皆さんは情報リテラシーやボランティア活動というようなことに関しては信じられないくらい進化しています。スポーツや芸術の世界でも皆さんの世代の国際的活躍は素晴らしいものがあります。このような状況を見ますと、前世代や旧世代に劣ることは全くありません。申し上げたいことは、皆さんが育ってきた時代環境の中で、ごく自然に身に付けた能力や精神を武器としてまた誇りにして、工学が本来有する無限の可能性を信じ、どのような分野に進もうと、本学で培った工学をベースに新しい時代を担う技術者、社会人として人類社会の平和と幸福に貢献して頂きたいということです。

社会人として大成するには学生時代の友にも増して良き師と良き友が必要です。万人にとっての良き師、良き友でなく自らにとっての師であり友であることが大切です。その為には、自らが探さなければなりません。一所懸命に生きれば必ず現れます。その機会を見失わないで下さい。そして、皆さんが成長した時、他者あるいは後輩に対して自らが良き師、良き友となるためには、「愛すること、見守ること、諦めない」姿勢を持って下さい。

最後になりますが、大学にとって皆さんの今後の活躍が最大の喜びです。数十年先にどのような世界が待ち受けるかは、私の世代では見届けることは恐らく出来ませんが、皆さんには未知を覗く勇氣と確かな工学倫理を持って長い人生に立ち向かって下さい。本学の取得学位に相応しい皆さんのご活躍を期待して、私の挨拶とさせていただきます。



平成23年度名古屋工業会賞贈呈式(学生支援事業)

理事長挨拶

社団法人名古屋工業会

理事長 篠田 陽史 (M33)

平成23年度学位記授与式にあたり、名古屋工業大学全学同窓会であります社団法人名古屋工業会を代表して、本日もたく学位記を授与されました皆様に心からのお祝いを申し上げます。

またこれまでの勉学の努力、スポーツ、学内外の活動での人間形成の成果に対して深く敬意を表しますとともに、社会人学生、留学生の方々など厳しい環境の中で学業を全うし本日を迎えられること、その意欲に強く感銘を受けるものであります。

また本日学位記を授与された皆様、ご同席のご家族そして関係者の皆様には栄えあるこの日を迎えられる、感激と喜びも如何ばかりかと感ずる次第であります。

先程22名の方々に、名古屋工業会賞を贈呈いたしました。この賞は名古屋工業大学を卒業された方々のうち、極めて学業成績が優秀であり、人格、感性ともに他の学生の模範となると認められた方々に、学長の推挙に基づき贈呈いたしましたもので、今後の大いなる活躍を期待いたします。

今日皆様は実社会に、次の勉学にと未来への新しい一歩を踏み出します。

今我が国はリーマンショックから始まった長い不況に加え東日本大震災という未曾有の災害に襲われました。その傷跡は深くまだまだ多大な努力と知恵が求められています。いよいよ諸君の活躍を待っています。

さて、この機会に先に社会に出た先輩として、どうしても皆様に伝えたいことがあります。

私が名古屋工業会理事長に選任されて、これが四回目の学位記授与式になりますが、毎回同じことを訴えてきました。それは名古屋工業大学への帰属意識、アイデンティティを強く持つてほしいことでもあります。

大学は私の在学時の国立大学とは異なり国立大学法人です。法人とは大学が自分で生きてゆくことを意味します。

国立大学が法人化されたのは国家財政が破綻

寸前となり、教育といえどもお金を回せなくなってきたためです。大学を維持するための運営費交付金が毎年削減されるなか大学は学長以下、全学が血の出るような努力で自己資金を集められ、この大不況の中で目覚ましい研究成果を挙げてられました。この成果は文科省の評価のみならず英国ネイチャーや国内マスコミにも大きく取り上げられています。

しかし大学が置かれている状況と将来はますます多難であり、生き残りまでかかっています。文科省は近い将来、全国の大学の縮小、統合まで考えているとも言われています。

このような大学の状況を諸君は切実には感じてないと思います。また本日もご出席のご家族の方々も知っておられる方は少ないと思います。

法人化後7年、先生方はまず自分たちが努力し成果を挙げるこそが生き残る道だと考えられ、諸君には出来る限りのいい環境を与えてられたとおもいます。これからは諸君が大学を支援する番になります。

支援とは、まず第一に社会において一流になり、実績を挙げることです。そのためには大学とのコンタクトを深く持つことが必要です。

諸君は極めて幸運です。諸君から初めて生涯メールアドレスを持つことが出来ました、在学時代と同じです、大学とのコンタクトが格段に容易になります。

また各分野に広がる7万人にならんとする卒



業生の知識、経験を活用することも大切です。大学、同窓会組織はこれらの提供、交換、研鑽の場を提供します。ここでも生涯メールアドレスは役に立ちます。

考えてみてください。100年を超える歴史を持つ卒業生の産、官、学での大きな実績のバックアップにより名古屋工業大学は就職難を感じることが少なかったと思います。これこそ大学支援といえます。

金銭的な支援も大切です。諸君が収入を得るようになった時には大学への寄付も考えるべきです。

大学では教育、研究環境の整備充実を目的として、大学基金への寄付を継続的に募るシステムを動かしています。各種の同窓会や集まり、イベントのとき、たとえ少しでも寄付をする習慣が出来ればその中で母校に対するアイデン

ティティも養われると思います。名工大に入ったからこそ出来る集まりですから。

母校が衰退してゆくことは諸君に対する社会の評価が下がってゆくことを意味します。色々な意味で不利になることです。何度も言いますが、これからは諸君が卒業生として、大学を支え、繁栄させて行く役目を担う立場になった事を忘れないで頂くようお願いいたします。

卒業生、在校生の組織である名古屋工業会も法人法改正に伴う新定款では、事業目的の第一を、大学の支援としました。

最後になりましたが、これまで皆様を育ててくださいました、ご家族に深い敬意を表しますと共に、教育、研究のご指導を頂きました、教職員の皆さま方に心からの謝意を表し、私の挨拶といたします。

名古屋工業会賞の贈呈

名古屋工業会賞の贈呈式が平成24年3月23日(金)に名古屋工業大学学位記授与式の中で行われ、篠田理事長から下記の22名に表彰状と記念品(刻銘入り時計)が贈呈された。

名古屋工業会賞は、第一部・第二部の各学科を卒業する者のうち、在学中の学業成績が極めて優秀であり、豊かな感性を持ち他の学生の模範となる学生に対して、学長の推挙に基づき贈呈するものです。



贈呈者

(第一部)

生命・物質工学科	近藤 健	内藤孝二郎	森 友香
環境材料工学科	渡邊 桃子	堀田 京子	
機械工学科	平野 遼	吉川 翔太	後藤 祐樹
電気電子工学科	田嶋 元紀	三輪 圭史	堀 寛己
情報工学科	柴川 元宏	里見 優樹	各務 友美
建築・デザイン工学科	松本 拓也	秋利 康介	
都市社会工学科	大橋 雅也	崎村 一仁	

(第二部)

物質工学科	濱田 秀幸	電気情報工学科	山下 隼
機械工学科	森 勇二	社会開発工学科	竹下 真由

平成24年度 名古屋工業大学入学式

平成24年度の名古屋工業大学入学式が4月6日(金)の10時から名古屋市公会堂大ホールで開催されました。

式典は大学の役職者及びOB特別講演の講師のトヨタ車体(株)取締役会長水嶋敏夫さんが列席して、名工大管弦楽団の奏楽で開会し、学長から大学院博士前期課程646名、後期課程55名、第一部990名、第二部24名の合計1,715名の入学が許可された。続いて各代表から宣誓を行い学長から式辞が述べられ、合唱団の学歌合唱で閉幕した。

その後成績優秀入学者表彰で、前期試験で各学科の成績最優秀者7名に30万円の目録が授与された。

入学式の後、OB特別講演会があり、講師のトヨタ車体(株)取締役会長水嶋敏夫様から新入生に対する講演が行われ、終了後学長から水嶋様に名誉博士号が授与された。水嶋様の講演概要は次号に掲載予定。

(成績優秀入学者)

- 安井 伸浩(生命・物質工学科)
- 守屋 洋伸(環境材料工学科)
- 伊藤 武史(機械工学科)
- 安田 拓真(電気電子工学科)
- 小川 悟史(情報工学科)
- 伊藤 静香(建築・デザイン工学科)
- 田中 敬大(都市社会工学科)





平成24年度入学式

学長式辞

国立大学法人名古屋工業大学

学長 高橋 実

本日、式辞を述べる前に、東日本大震災について一言申し上げます。震災発生後、早や1年が経ちました。国民・国家一丸となつての復旧・復興は未だ途上ではありますが、本学としても物心両面において可能な限りの支援を続けてまいります。

さて、本日、大学院701名、学部1,014名、合計1,715名の入学を許可しました。留学生は80名、社会人は30名です。

名古屋工業大学を代表して歓迎の辞を申し上げます。

本学は、明治38年に中部地域初の官立であり、また全国で4番目の高等工業教育機関となる名古屋高等工業学校として創立され、今日に至るまで7万人を超える優れた人材を輩出し、我が国の産業社会の礎を築きその繁栄を支えてきました。充実した実践教育により育てられた人材は、産業・社会構造の変化や景気の動向にもかかわらず、ほぼ100%の就職率と産業界等での幹部職登用の高さに繋がっています。現在、本学は工学分野をほぼ網羅した諸学科があり、また学生数は国立大学工学部の中で屈指の規模を擁しています。しかし、これまでの実績や現状に甘んじることなく、次の時代に向けて更なる教育・研究の改革と進化に取り組んでいるところです。

皆さんがこれから学部生あるいは大学院生として勉学に邁進するに当たり、それぞれに問われる心構えあるいは姿勢といったことを幾つかお話ししたいと思います。

先ず学部ですが、ほとんどの学部入学生にとり大学の教育研究環境は未知の領域となり、期待とともに一抹の不安を持っているかと思えます。昨今、高校と大学の接続が学力、志望動機などの面から問題にされています。私自身を振り返りますと、小学生の頃は貧困や障害にめげ

ずに世界に飛び立った野口英世博士に憧れました。中学生の頃になると、内容は分からないままに日本人初のノーベル賞を受賞された湯川秀樹博士に畏敬の念を持ちました。高校生になると、原子や分子などの概念を教わる中で、どうして人間は自らを構成する物質要素を理解できるのか、脳の仕組みや働きが不思議でなりません。大学を受験する時、理学分野では誕生直後の生命物理、工学分野では一個人の力で絶対叶わない宇宙ロケット開発などに想いを馳せました。入学した1960年代後半は世界的に学生運動、女性解放などの波がうねっていた時代であり、理系ではあるもの人間社会に自然と関心を寄せました。振り返ると、医学、生命、社会など人間に直接関わる領域への興味が強かったようです。現実には工学部・資源開発工学科で学ぶことになり、名古屋工業大学に赴任後はセラミックスと粉の世界に転じました。セラミックスや粉体は工学の一つの分野に過ぎませんが、人に直接関わる領域への関心を持ち続けることで、単に工業部材を創ることを越えてエネルギー、資源、環境などの人類が直面する課題の解決に少しでも貢献することに努力してきたつもりです。

皆さんには、先ずは数学、物理、化学、生物などの自然科学をしっかりと身に付けるとともに社会科学、人文科学についても高い関心を抱



いて下さい。工学は科学と技術を繋げ、「ものづくり」「社会づくり」を通じて豊かで平和な社会の実現に寄与することが大義ではありますが、「ものづくり」と「社会づくり」さらには「ひとづくり」が一体的に要求される時代が迫っています。このためにも、そして長い人生を生き抜くためにも科学としての自然科学だけでは足りず社会科学、人文科学の学びも必要です。その中で本当に自分のやりたい事、言い換えれば専門性を見つけて下さい。本学に限らず工学部の諸学科は私の学生時代とは比べ物にならないぐらいに教育・研究の対象範囲を広げています。皆さんが選んだ学科は皆さんの多様な要求に応えてくれるでしょう。また、基礎がしっかりしていれば、多少異なる分野であろうと何とかあります。

大学院生は、学部で習得した専門性を深化させ、就職もほんやりと考え始める時期になるかと思います。私が研究指導していた当時に、学生に対して常々言っていたことが二つあります。一つは、「工学部学生は馬鹿でなければ務まらない」。馬鹿の意味は途方もない柔軟性と貪欲な好奇心を持つべきであるということです。一見つまらない課題でも、分からないことや大切なことが沢山含まれています。余程のことで無い限り、「つまらないものが面白く」「面白いものがより面白く」なるのが工学気質だと思います。自らが取り組んだ研究課題について、例えそれが指導教員により与えられたものであるにせよ数ヶ月過ぎても興味を持っていないのなら、課題を変更しても躓くケースが多いのです。ただし、どうしても自分には合わないというものがあります。その時には何故合わないかをしっかりと考え、次の課題に活かして下さい。社会に出ても同じことが言えると思います。二つ目は、一つ目とは反対に聞こえるようですが「専門性を大事に下さい」ということです。その意味は研究で培われた「モノや事象の本質の捉え方」が大切であり、知識の単なる寄せ集めが問題ではないということです。例えば学生時にセラミックスを対象とし、卒業後に異なる素材である金属やポリマーを取り扱うこ

とになったとしても、それまでの研究を通じて身に付けた視点、考え方、手法などを持って金属あるいはポリマーに立ち向かうことが新しい発見、発明、製品に繋がる可能性が高いという意味です。「セラミックス」「金属」「ポリマー」を引っ繰り返しても言えますし、また素材を別のキーワードに変えれば他の分野についても言えると思います。知識だけを追いかけていては永遠の無駄です。

そして、学部生と院生に共通してお願いすることが三つあります。100年、200年先のような超未来は分かりませんが、少なくともこれからの「ものづくり」「社会づくり」にはICTの活用は必須であり、是非とも情報リテラシーを自分のものにして下さい。もう一つは英語力です。グローバル化が進む中、英語によるコミュニケーションを無視することは非現実的です。分野を問わず、この二つの力あるいはツールに自信を持てるようにして下さい。ここ数年、本学は海外留学支援を強化しています。機会があれば積極的に手を挙げて下さい。また、およそ400名となる海外からの留学生とも交流を深めて下さい。そして、異なる文化や価値観に耳を傾け、理解し、受容できるグローバル人を目指しましょう。これが三つ目です。

ところで工学部の「工」の字源には諸説ありますが、その一つに上下の横線が天と地で縦線が人を表すというものがあります。何と気宇広大な文字でしょう。言葉遊びをする気は毛頭ありませんが、未来に「向かう」学問、幅の「広い」学問、「高度な」学問、何れも「コウ」と読めます。皆さんに配布します名古屋工業大学憲章にはこの様な意味が込められています。是非、工学の無限の可能性と本学に合格した力を信じて研鑽を積み、次の時代を担う技術者として育てて下さい。

最後になりますが、大学は人間が産み出した最良の制度の一つです。皆さんには、この制度の意義を噛みしめ、悔いの無い充実したキャンパスライフを送って下さい。

以上をもちまして、本日の式辞とさせていただきます。

OB講演会

(学生就職支援事業)

名古屋工業会が主催する学生の就職支援事業として、平成23年度OB講演会が12月7日(水)の15時から名古屋工業大学の大講義室で開催され、就職活動にかかわる大学院生、学部生の多数が出席し熱心に聴講した。

講師の元デンソー(株)の入倉則夫様から「ものづくりは楽しい」、三菱航空機(株)の山中清様から「目指そうエンジニア 翔けよう輝く未来へ」という演題で講演され、終了後熱心な質疑応答が行われた。以下はその講演概要です。

入倉則夫氏ご講演

ものづくりは楽しい

皆さん、こんにちは。2009年末まで(株)デンソーに勤めていました入倉と申します。今回、就職支援ガイダンスで、在職時代のお話ができることを楽しみにしていました。始めにお断りしておきたいのですが、この類の話は自慢話やお説教のようになりがちです。注意しますが、多少はご勘弁願いたいと思います。

1. はじめに

私は1949年生まれの団塊の世代です。全国の大学で大学闘争がおきていた時代に名工大で学生生活を送りました。はがきが10円の時代です。1972年の卒業と同時に、トヨタ系自動車部品製造会社の日本電装(株)に就職し、電装品生産技術の仕事を約30年間、その後退職までの10年間は全社的品質管理(TQMと呼ばれる)の推進に携わってきました。

在職中、(株)デンソーは日本の自動車産業の発展とともに大きく成長し、入社時に比較しますと、売上高、純利益ともに20倍以上の大企業になりました。会社が成長するという幸運な時代

に大きな仕事にも参画することができました。時代背景は違いますが、皆さんが就職進路を考える際の参考になれば幸いです。

2. ものづくりをデザインする楽しさ

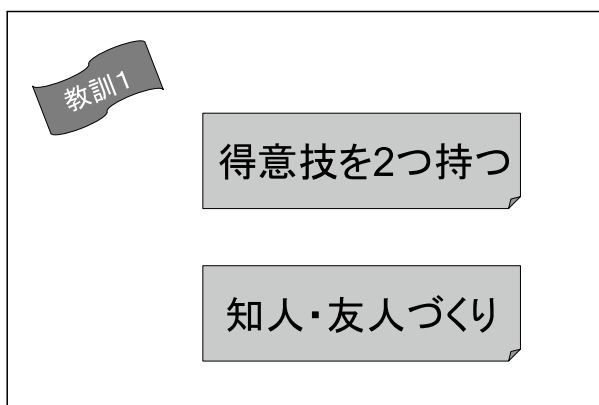
「工場をデザインする話」と「ものづくりの大変さ」についてお話をします。

入社4年目(27歳)に生産技術者として、新工場建設プロジェクトメンバーとなりました。名古屋ドームと同じ大きさの規模でした。工場は社の歴史とともに、建造物として何十年も残ります。ここに自分の仕事の原点があると実感しています。

工場には多くの生産ラインが敷設されます。その時に、統計的品質管理(SQCと呼ばれる)を学びました。生産技術者の役割は、生産の3要素すなわちヒト・モノ・カネを最適に組み合わせ、「設計図」をかたちのあるものを作り上げるプロセスをデザインすることです。QCD(品質・コスト・納期)の効率の良い一連の生産システムを構築することです。品質の側面から言えば、バラツキが少なく、信頼性の高い生産システムづくりと品質問題の再発防止と未然防止に注力するわけです。例えば、設備の最適加工条件の設定やトラブルの解析などは、まさに生産技術者の仕事なのです。そこで、科学的、合理的に判断するツールいや武器として、SQCの重要性を認識しました。当時の上司の勧めもあり、トヨタグループのSQC研究会にも参加し、実験計画法や多変量解析について勉強をしました。それらの統計手法を活用した工程解析や品質問題の解決に寄与した事例をもとに、1986年に共著『工業における多変量データの解析』(日科技連出版社、日経品質管理文献賞受賞)とい

う専門書を発刊することができました。このときに、統計や品質管理の多くの先生方と知り合いになりました。

ここで「教訓1」です。「得意技を2つ持つこと」と「知人・友人づくり」です。私にとっては、ものづくりの生産技術という技と品質管理という技を体得し、その過程を通じて社内外の友人、知人、先輩、先生方を広く知りえたわけです。人的ネットワークを大切にしたいものです。

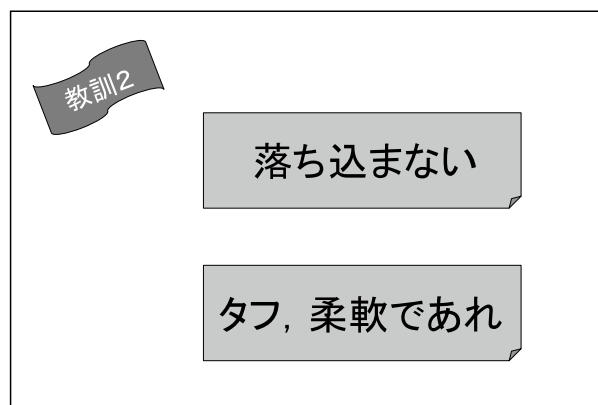


ものづくりは楽しいことばかりではありません。1989年、入社17年目（40歳）の頃です。年号が昭和から平成に変わり、円高で1ドルが100円を切るようになり、家電に続いて自動車も海外現地生産に踏み切らざるを得ない時代になりました。はがきが41円の頃です。新米の生産技術課長としてアメリカ・テネシー工場の建設プロジェクトに参画し、デンソー初の北米における本格的な電装品工場の建設と新ラインの敷設に従事しました。今思いますと、私自身も会社自体も、死に物狂いに取り組んでいました。300億円にのぼる社運を賭けたプロジェクトでした。

建屋の完成後、日本から運んでいった多くのラインが、米人だけでは運転できないことが判明しました。設備の運転技術を指導し、設備の完成度も高いはずなのですが、米人のチームリーダーと作業員だけでは操業できないのです。日本人作業員の技能レベルに米人が到達で

きないうえに、米人作業員と米人保全員のチームワークが良くないわけです。日本人作業員は入社後、何年にもわたってものづくりを体験し、習熟し、チームワークが良いわけです。結局、日本人が長期間にわたって支援活動に従事せざるを得なくなりました。当然、日本側では「いつまで日本からの出張支援が要るのだ？金がかかるばかりだ！」、「難しい設備をつくってしまっ…」と罵声ができます。物事の具合が悪くなると、人は離れていくものです。形勢不利となると、ずっと消える人が多いのが世の常です。部下は上司を選ぶことができません。宮仕えはつらいですね（笑い）。

ここで、教訓2です。「仕事に落ち込まない」、「人生にタフ、柔軟であれ」と。いい時もある、悪い時もあると冷静になることですね。

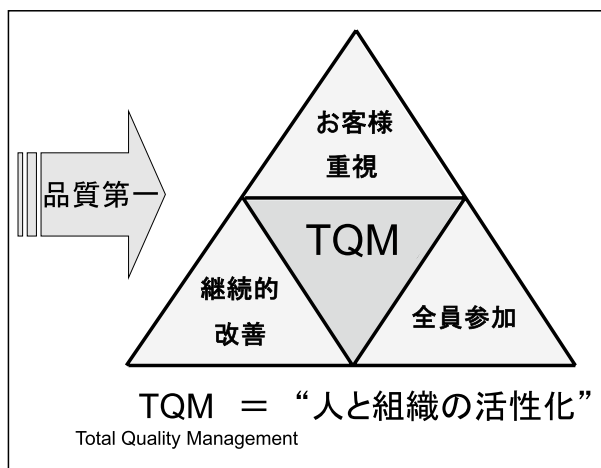


3. グローバル化に貢献する楽しさ

次に、「欧州の商圈拡大に寄与した話」と「デンソー流ものづくりの考え方を世界中のデンソーの仲間へ伝授始めた話」をします。

1991年、入社19年目（42歳）の頃です。北米プロジェクトも峠を越した頃です。スウェーデンVOLVO社にテネシー工場に製造する電装品を売り込むというプレゼンテーションをすることになりました。技術屋といえども、英語がしゃべれないとダメですね。汗をかきながらのプレゼンで、英語は世界の標準語と再認識したものです。皆さん、若い時から、英語と仲良くなりましょう（笑い）。

さて、入社28年目、50歳にして本社経営企画部TQM推進室という部署に異動となりました。どんな仕事をする部署かと申しますと、国内外のデンソーグループ会社に、品質を基軸としたマネジメント、すなわちデンソー流のものづくりの精神、価値観を広める部署です。「人と組織の活性化」をねらいに、「品質第一」の考え方をベースとして、「お客様重視」、「継続的改善」、「全員参加」を進めることです。これがTQM (Total Quality Management) の基本的考え方なのです。KAIZENは今や、世界の普遍的な哲学になっているのではないのでしょうか。ご存知のように、企業の活動にはイノベーション(革新)が欠かせません。技術のブレークスルー(大躍進)も大事です。常にイノベーションやブレークスルーが生まれる職場風土が必要なのです。その職場風土の醸成にTQMが役立ち、日常的に改善活動が行われていて、初めてイノベーションやブレークスルーが生まれるのです。



このTQMの基本的考え方を、私は欧州の工場で力説してきました。各工場ともに、デンソー本社からの日本人社長の下で生産活動はなんとかやっていますが、現地が自律するためには、デンソー流のものづくりの真髓を体得してほしいわけです。イタリア、スペイン、ハンガリーなどの工場の管理職を対象にTQMセミナーを進めました。彼ら彼女らは熱心に聞いてくれて、

グループ討議にも熱が入りました。自ら世界中に出かけていき、まさに社のグローバル化に貢献する楽しさです。この活動は現在も、後輩が継続していると思います。

4. おわりに一元気ができる小説

終わりに、私が最近読んだ小説を紹介します。池井戸潤さんの2011年度上半期直木賞受賞作品『下町ロケット』(小学館)です。挫折を乗り越える男たちのプライド、会社って何? 生きるって何? ものづくり自体に熱い感動を覚えました。就職活動に忙しいかと思いますが、お正月休みに、是非この本を読んで一息入れてください。

ご清聴いただきありがとうございました。皆さんが首尾よく社会人になられることを祈念いたします。

「下町ロケット」のあらすじ

ロケットエンジンの研究者であった主人公:佃航平は、今は父の町工場を継いでいる。従業員200人、年商90億円の中小企業の経営者である

ある日、ライバル企業から特許侵害で訴訟を起こされる。形勢不利。大ピンチ。ところが、佃製作所がもつ水素エンジンのバルブ特許が最新鋭のロケット開発に不可欠であることがわかる。その開発を受け持つ大企業からの圧力、買収工作、いやがらせが続く。

それでも、若い経営者:佃航平が見出したもの……それは、会社は小さくても技術は負けない!

男たちのプライド、意地。そして、会社って何? 仕事って何? 生きるって何? ものをつくること自体に感動がある。

入倉則夫

- ・1972年 名古屋工業大学工学部経営工学科卒業
- ・1972年 日本電装(株)(現(株)デンソー)入社 電装品生産技術に従事
- ・2005年 東京工業大学大学院社会理工学研究科修了 博士(工学)
- ・2009年 (株)デンソーを定年退社

山中 清氏ご講演

めざそうエンジニア

—翔けよう輝く未来へ—

1. はじめに

数年前から二部の「職業指導」実務型教員を務めており、その内容に加え、来年度に向け就職活動を始めている3年生及び修士1年生を対象に、私が「エンジニア」を目指した背景や就職後30数年を振り返って企業が求める人間像について講演する機会を得たのでその概要を以下にご紹介させていただきます。

2. 目的・背景

近年就職氷河期が続く中、遣り甲斐のある仕事とは何か、大学卒業後どのような分野の会社を選択するかまだ決めかねている学生の皆さんが、見た目の評判の良さ、大企業安定志向だけで選択し後で後悔しないために、私の職業選択、経験した苦労や挫折、それを乗り越えて得た喜び、その時々でどう感じ、どう行動したかを説明し、同じ失敗をせず、自分の望む職業に就くためのアドバイスをします。

3. 講演内容

I. エンジニアを選んだ理由 (図1)

小京都伊賀上野郊外の自然豊かな農村部に生まれ小さいころから遊び道具（忍者遊びの手裏剣をブリキで自作）や趣味（昆虫採集の標本規模が多数になり特大標本箱自作）において自作が好きで、また近所のテレビの修理を行い、修理後感謝されることが楽しかった。このような経験から自分でイメージしたものを作ったり、機能品のからくりを熟知し故障品修理ができる職業として「エンジニア」を選択しました。

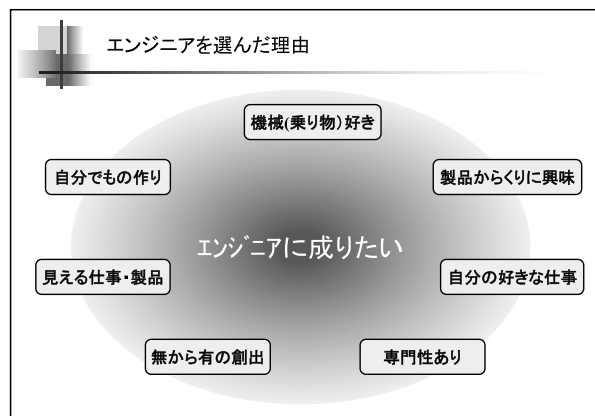


図1. エンジニアを選んだ理由

II. キャリア形成

私が卒業した昭和52年は第一次オイルショックの影響が色濃く残っていた時代であり、また情報工学科第I期生で初めての就職でもあり他の学科のように順調ではありませんでした。当時情報工学科卒業生の就職先は自動車関連メーカー、コンピュータメーカー、大手企業の電算機要員、ソフトウェアハウス等ソフトウェア会社があったが、ソフトウェア寄りが中心で、一部のメーカーを除き我々の身近な製品のものづくりに直接関係しない企業が主流であったため、私もIT関係に就職しました。しかしながら当時のIT業界は会社規模も小さく、成長産業であったため深夜に及ぶ長時間残業/休日出勤が慢性的に続きさすがに心身とも疲れきって、会社を辞めたいと思うようになりました。しかし、先輩からは「やめたい理由を明確にし自分の将来をどう切り拓いていくかじっくり考えないと負け犬になる。長期的に考えて行動せよ。少なくとも3年は我慢しろ」と忠告されこの時自分をじっくり見つめなおすことが出来ました。その結果出した結論は以下の2点です。

1) 転職は自分の目指す理想を実現するための軌道修正と心得よ。会社が嫌だから、上司を含め人間関係がうまくいかないからといって逃げてはならない。自分が原因の場合は次の会社でも同じことになる。

2) 会社にばかり期待してはならない。自分が日頃から勉強し会社に自分を売り込める能力を備えておくことが必要。また、エンジニアにとって技術は日進月歩で急激に変化しており、技術トレンドを常に把握し、この先どうなっていくか自分なりに予測し対応できる自分を維持しておく。

この方針が功を奏しその後転職しIT技術の経験を生かして航空機の操縦・制御分野のエンジニアとして今まで続けることが出来た原動力になっています。

Ⅲこれから就職活動をする諸君へ

IT業界や航空宇宙業界で設計に従事してきた経験から私なりの企業が社員に求める一般的な能力を図2で説明した。

さらに、企業側から求められる人間像として、

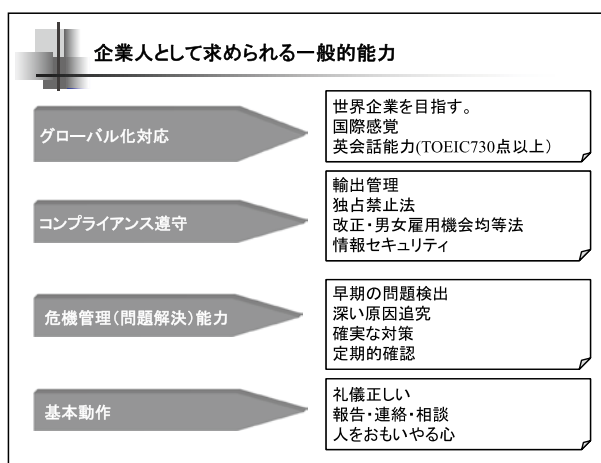


図2. 企業が社員に求める一般的な能力



図3. 面接時重視のキーワード

面接時重視されそうなキーワードを図3に示した。

4. おわりに

当日の講演場所は、名工大で一番収容人数が多い講義室で行うというだけでどの場所かわかりませんでした。ご案内頂いた瞬間に、30数年前大講義室で受講した教養課程の授業の記憶が懐かしく蘇ってまいりました。

しかも、今私が講師としてこの階段教室の演台に立っていると思うと非常に緊張しましたが、学生が注目して聞いてくれていることを確認しながら話すうち自分のペースで講演ができました。

さらに、学生からの質問も多数あり私の職業観が今の学生にも通じてほっとしています。

最後に今回のこのような講演の機会を与えて頂いた名古屋工業大学と名古屋工業会に感謝するとともに、学生時代にご指導を賜りました恩師の先生方、多方面でご活躍の先輩方や同窓の皆様の前で執筆させていただいていると考えると、とても身が引き締まる思いがします。また、このような内容で大変恥ずかしくもございますが、少しでもこれから就職活動を始める学生諸君に有益なものになれば幸いです。

山中 清

- ・昭和52年 名工大情報工学科卒業
- ・昭和52年 (株)日本ビジネスコンサルタント入社
- ・昭和55年 三菱重工業(株)入社
- ・平成22年 三菱重工業(株)役職定年
- ・平成22年 三菱航空機(株)に派遣され国産旅客機MRJ開発チームに参画

交流コーナー

現在の形の名工大の御器所 キャンパスへの統合に至る舞台裏

小原 治男 (C37)

1. 本校と分校との分離状態の解消への学生としての取り組み

私は昭和32年4月に当時の土木工学科に入学し昭和37年3月に卒業して愛知県庁に入庁し、平成11年3月に定年退職した者です。

お陰様とこの県庁在職中、土木出身としては比較的多くの部署を経験し自分なりに精一杯働いたつもりです。そしてどんな時にあっても名工大の卒業生であることを誇りに思ってきました。

私はこれから述べるような事情があって名工大の卒業後も特に10年～15年位は母校・名工大の御器所キャンパスの整備進展の状況を特別なまなざしで見守ってきました。それは、私が大学2年の秋頃から名工大の御器所キャンパスへの統合運動に学生として深くかかわったからです。そしてこのために卒業も1年遅れました。褒められたことではありませんが、この統合運動への没入のために5年間の在学期間があったものの、実際には正味3年足らずの学業の勉強しかしていないように思います。当然のこととは言え、卒業成績も超低空飛行だったと思っています。なんとか卒業をさせてもらったと言うのがその実態だったと思います。しかしながら、この統合運動の成就のために自らもって生まれた性格とは思いますがまさに一身を投げ打っての取り組みをしました。

さて、私が入学した頃は教養課程が旧愛工専跡の千種キャンパス、専門課程が御器所キャンパスで行われていました。それも千種キャンパスは旧日本軍兵器廠跡²の二階建ての建物、御器所キャンパスはこれまた二階建てのバラックそのものでした。ただ、電気工学科（焼失を免れた建物）と工業化学科・金属工学科は鉄筋コンクリート構造物だったと記憶しています。今

日の整然と整備された建物群と比べると、これはまさに隔世の感があります。

想い起こしますと、私が大学に入学した昭和32年頃は先の大戦の敗戦から12年、日本の独立後からも6年しか経っていませんでした。今の名城地区の官庁街をなす一画には米駐留軍の宿舎があるなど市内各所にこの種の施設がありました。そして千種キャンパス周辺ではアメリカ駐留軍兵士の日本女性とのアベック姿をよく見たものです。いずれにしても、敗戦後の名残を街のあちこちに見かけ、日本はまだ貧しい状況でした。

こうした中であって、名工大は1年次から専門課程が導入されていたこともあり、我々学生は教養課程のための千種キャンパス、専門課程のための御器所キャンパスと一週間の内でも両方のキャンパスに通学しました。当時の名工大は国立の二期校でしたのでご多聞にもれず私も関西の名門大学に挑戦するも失敗し、家庭の事情から浪人も許されず、半ば意気消沈して名工大に入学し少なくとも半年位は学業への意欲も湧きませんでした。これは私の実力からして多分に意識過剰な面があったことは否めませんが。なお、私の生まれ育ったところは名古屋の郊外の田舎である関係もあってか私の年代では高校進学も3割に満たない状況でした。

学校に1年、2年と通ううちに名工大のみすぼらしい外観もさることながら、タコ足大学と揶揄された総合大学としての名大は東山キャンパスへの統合ビジョンの下に名工大の隣の医学部を除いて着々と東山キャンパスの統合整備が図られつつありました。一方、我が名工大は私の気持ちの落ち着いた2年次に入った時点でも統合への動きは一切ありませんでした。一体、学校は何を考えているのだろうかといぶかる気持

ちが私の心の底にありました。伝統のある国立の工業大学として全国からそれなりに優秀な学生を集めながら大学の統合ビジョンがないのはおかしいのではないのかと思いましたし、大学は建物や外観だけではないにしろ、それなりに整ったたたずまいも必要条件ではないかと思いました。それも今すぐには出来ないまでもとりあえずの臨時的な措置として出発した筈の二つのキャンパスにまたがる形のままではいけないのではないかと。もし、このへんのビジョンがあり整備の方向が見えるならば、たとえ、心ならずもこの大学に入ってきた学生にも大きな活を入れることになるのではないかと心の底のどこかで思っていました。

そうしましたところ、私の2年の後期と思いますが学生の中から、私の理解では機械工学科から学生の声として、この名工大の現状を打開しようとの声が挙がり、これを学生自治会が取り上げることとなり、学生自治会からは殆ど独立した形での名工大の統合委員会が設けられ2年生を中心とする各学科のクラスから代表を一人選ぶことになりました。そこで、私は元々すでに述べたような問題意識を持っていたので私は選ばれたというよりもむしろ名乗りを挙げてクラス代表の委員になりました。そしてこの統合委員会で当初はトップにはなりませんでしたが活動を進めるうちに、知らぬ間に次第に中心的な存在として活動するようになりました。

私は、本来、いわゆる保守的な考えを抱いていましたので当時のいわゆる学生運動は御免こうむるという気持ちでしたが、事この運動については価値のあることであり誰かがやらなければならないとすればこの自分が皆の協力を得てやろうとの覚悟で取り組みを始めました。ある意味では私は奇人・変人の部類に入ってしまうでしょう。

そして名工大の伝統もさることながら中京圏は日本の工業の中心でありこの日本のためにもお隣の名大に比肩し得る、あるいはそれ以上の特色ある単科大学としての存在感もあっていいのではないかと思いました。そして今と当時

とは時代背景も大きく違ってきていますが、学生が全国から二期校とはいえ迷うことなくこの大学に入ってきてくれる大学にならないかと想ったのです。このような考えは現時点で後付けしている面もあるかとは思いますが、私がこの統合運動に参画した時に思い描いていたことです。私はこのような覚悟と心意気で取り組みましたが一緒に行動してくれた仲間の皆さんには多大の迷惑をかけたのではないかと思っています。

我々が統合運動を進めた時にはいろいろと学生への説明資料を作ったのですが、日時の経過もあり、社会に出てからは与えられた職務に精一杯だったこともあり、当時の資料は散逸し一切残っていないが故に、本稿は私の約50年前の記憶を呼び起こして書いており、従って私自身の記憶違い（特に前後関係について）もあるかと思っていますので、このことについては、どうかご容赦ください。が、問題解決への進め方の基本的な流れは今にいたるも鮮明に記憶しているつもりです。自分で述べるのも僭越ですが、学生としてこの統合運動の最初からその幕引きに至るまでの当事者といってもよいと思います。それと後に述べるようにこれが実現できたのは学校当局としての行動・尽力があってこそですが、我々の取り組みの結果が現在の名工大の御器所キャンパス統合の形で実現されていることが我々の行動・取り組みが事実（本当らしいことを）であったことを如実に示していると思います。そこで以下にその取り組みを記したいと思います。

2. 名工大の本校・分校の統合の取り組みの経緯での端緒

我々は、まず、最初に我々学生なりの学校キャンパスの分離状態の問題点を摘出し、学校当局はこの問題についてどう考え、どう取り組もうとしているのかの学生としての意思統一を図った上で当時の学長である清水勤二学長との面談を申込み、学校側のこの問題への問題意識と取り組み状況を問いただす場を持ち、学長の考え

を尋ねました。ところが、残念なことに、また端的に言えば、学長の頭にはこの問題解決への意欲は全くと言っていいほど感じられませんでした。うまく宥めようとするのみでした。大変失礼な表現ではありますが。

清水学長は名工大が新制大学として発足時、いろいろとご苦労されたとは思いますが、学長としての在職期間は文部省の直接の任命人事を含めて6年以上学長職にあったと思います。この大学のそれまでの工業専門学校から新制大学への移行期の重要な時期に学長をしておられたのですが、とりあえず大学として出発した御器所キャンパスと千種キャンパスの二つに分離した形での学校運営を将来的にどうしていくかのビジョンというか、問題意識を持ち合わせておられなかったようであります。

確かに、この当時は全国的にどの学校も同じような問題を抱えてはいました。ところが近隣の国立大学について言えば、名大についてはおそらくは名古屋市の全面的な支援もあり街の真ん中において市民と直結した医学部・付属病院を除いて東山キャンパスへの統合が決定され着々と進められていました。もう一つの国立大学である愛知教育大学（当時は愛知学芸大学で県の西と東の二つに分離していた）については愛知県（当時の桑原知事）が支援・仲介する形で刈谷市での統合計画が進められつつありました。

このような時に発足当初の二つに分離したままの名工大のキャンパス統合の学生運動のリーダー的立場にあった私はこの問題を提起した学生として、もはや、この清水学長を相手にしてはいけないということに思い至り、学生自らが統合プランの作成とその運動を進めることにしました。まさに不屈の精神で取り組んだ訳です。

この運動を進めるに当たっては一般学生の関心も高く運動の節目には校門の近くの中央広場で必要な経過説明の手順を踏みました。そしてこの運動を進めるための資金カンパもしました。この運動を進めた我々学生は自腹をきった

ことも多々あるとは思いますが、運動を進めるための必要な交通費やパンフ作成代はこうしたカンパで賄うことができたと思います。既に触れましたようにこうした資料は一切残ってはいませんし、私個人としても一切持ち合わせていません。小なりといえども学生から集めた公の金で作成したパンフや行動記録は何らかの形で保管しておくのが筋だと言えばその通りだったとは思いますが。

3. 具体的な統合計画のプランとそのアプローチ

我々の着目した具体的な統合計画は、従前の御器所キャンパスを中心として①鶴舞公園北用地・今は教養部門のキャンパス（既存キャンパスと北側の100m道路との間にある用地）、②キャンパスの北東に隣接する県の工業指導所用地・今は国際交流会館などとして使われている、③キャンパスの南側に位置する当時の中部地建用地（これらの位置関係は末尾の平面図に示す）、この三つの用地を学校の用地として集合できれば御器所キャンパスは教養部門を①の用地に統合するなどすれば、今日的な大学としては決して広いキャンパスではないものの、一応の形が整うのではないかというものでした。そしてこれらはいずれも公有地であり、これらの用地の確保のためにはこれに見合う千種キャンパスの用地と等価交換するというものであります。勿論、文部省の特別の予算措置などでこれができることはありませんが、これに頼ることは問題の解決を複雑にするということで、このような等価交換という手法があるということを念頭において学生の立場で各方面に陳情活動を進めることとしました。

そこで、まずは最大の眼目として鶴舞公園北用地（市の都市計画では鶴舞公園北園として位置づけられていたが公園としては未整備の状況にあった）がなんとかならないかということでアプローチを始めました。そして手始めに統合委員である私の個人的な立場で名古屋市の公園緑地部の部長か課長かを自宅に訪ね、名工大の抱えている問題を話しての個人的な意見を伺い

ました。その方は確か東京農大の出身者ではなかったかと思いますが、こちらの心情が伝わったのか、思いの外、好意的な話を伺うことができました。その内容はこの用地は都市計画で公園用地として位置づけ戦災復興事業の一環として進めてきて従前の地権者には立ち退いてもらっている経緯もあり、方向転換をするとすると、これらの事業に協力していただいた方への配慮も欠かすことはできないが、市としては近くに鶴舞公園もあり地元の伝統ある国立大学である名工大であれば学校が真剣に取り組まれば可能ではないのかとの感触を得たのです。折角のご好意ある意見をいただいたこの方には、絶対に迷惑をかけてはいけないとの気持ちで受け止めつつ、この方の家を辞去しました。思わず、うれしさと感謝の気持ちがこみ上げてきました。

そして今度は名工大の統合委員会という学生としての立場で名古屋市役所に出向き市の杉戸助役に陳情することを申し入れたところこれが許されました。出向いたのは数人だったと思います。そして名工大のキャンパス分離の現状と統合のプランを杉戸助役にご説明して市としての協力を懇請したところ、助役は私どもの訴えを真摯に聞いて下さり驚くことに、このような責任ある立場の方から、鶴舞公園北用地については名工大のためになんとかしなければならないなどの言葉、感触を得たのです。また県工業指導所については事務所を訪れて所長に協力方陳情するとともに、当時、名工大の建築科出身の有力県議であった水平豊彦氏にもお願いしたように思います。さらに、当時の中部地建用地については建設省出身の教授（専門・河川工学）であった土木工学科の橋本規明先生に我々の取り組み状況を話したところ、（私はこの運動で授業をさぼりがちな中であって先生の河川工学の授業には格別の味わいがあり極力出るようにしていた）、先生にはご心配いただき古巣である中部地建に行かれて地建の意向を打診されるとともに学校への協力要請を橋本先生自身の立場で行っていただきました。これらの

運動を展開する中で県の工業指導所については刈谷市への移転計画があることや中部地建は名城地区の一画である三の丸への移転計画が浮かび上がってきました。

一方では、この運動を展開する中で東京を含めて有力な先輩を訪れて知恵と協力をお願いしました。その中の一人に当時清水建設の副社長をしておられた建築科出身の小笹徳蔵氏にもお会いすることができました。小笹氏からは我々如き若輩に対しての励ましとともにいっそのこと、この際郊外に広いキャンパスを求めたらどうかという意見もありました。

この頃はこの手法が大学のキャンパス展開の流れの一つでもありました。そこでこれも一つの考えかと思ひ名古屋市に合併前の市の南に位置する知多郡大高町を訪れ名工大の移転用地がないかどうかを打診したところ、会っていただいた助役さんは大変乗り気でした。その具体的な候補地として今の大高緑地一帯を挙げられたように記憶しています。ただ、この手法は既存の名工大・御器所キャンパス自体をどうするかなどの問題点も多くそれ以上進めることは思いとどまりました。これは将来の発展的な展望として描くのはともかく、これを現実の問題として進めるとなると、問題があまりにも大きくなりすぎて当面の統合問題を拡散させかねないと思いました。つまりは名古屋市の協力を得て先ずは北側の鶴舞公園北用地の確保と県の工業指導所用地、さらにはさして広くはないものの中部地建の用地を確保して整備することが最も現実的であるとの判断を統合委員会としてはしました。そして、この段階で学校当局が真剣に取り組む気があれば、我々の描いた統合プランは成就するに違いないとの確信に近いものを持つに至りました。

そしてさらなる第二キャンパスの構想・展開は次なる課題とし、学生として当初に目標として設定した統合問題の取り組みはやるだけやったとの段階に至りました。

4. 具体的な統合計画のプランを新任学長へバトンタッチ

この間に、先生の個人的な立場からではありませんでしたが建築科の城戸久教授に相談したりしました。城戸先生と接触をしている内に清水学長の後任に名工大の前身に当たる名古屋高等工業出身でその後東北大学に進まれ金属工学の分野で実績のある佐藤知雄教授を名工大の学長に招聘するという話を耳にしました。そして実際に学長に選出されました。

そこで、我々はこの佐藤先生に統合計画の実現を託することとし、先生の名古屋への赴任に先立って統合運動の実質的なリーダーの立場にあった私は先生に我々の今までの取り組みの経緯と解決の方向をまとめた書簡を送りました。ずいぶん分厚いものであったと思います（このことで、奥様から聞いたことですが郵送料不足に伴い先生にご迷惑をかけたとのことです）。拙い文だったと思いますが、読む気になっていたただければ大体は問題の所在と解決の方向性は分かるものであったと思います。併せて、先生には我々の先生に賭ける期待を意思表示するために名古屋赴任に際して名古屋駅頭で我々は統合委員会を中心とした学生30人前後で出迎え、歓迎をしました。

その後、統合委員会は人数を数人に絞って学長室でも先生にお会いしご尽力をお願いしましたところ、問題の所在は大体分かったので、私にこの問題の処理を任せてほしいと言われました。勿論、これは我々の望むところで以後、我々はこの問題から完全に手を引きました。

5. 統合運動を振り返ってみて

運動を始めてここに至るまでには1年余近くかかったと思います。勿論、この間、少なからずの試行錯誤もありました。そして我々の取り組みの結果を佐藤学長にバトンタッチした訳です。私はこの時点で佐藤学長ならば必ずこの問題を解決していただけるに違いないとの確信に近いものを抱いていました。

幸いにその後、佐藤学長はその言葉通り今日

の形での御器所キャンパスの統合計画を着実に進めていただきました。我々の問題提起があったとはいえ、御器所キャンパスが今日の形でまとめていただいたのは佐藤先生のお蔭なのです。今は亡き人ですがここに心からその霊前にお礼申し上げたいと思います。何故なら、我々の心からの願いとその運動が実を結んだからです。

今から振り返ってみても、名工大にとっては、この統合計画の実現の持つ意味は大きいと思います。決してこのことは所管官庁である文部省の指示・企画でもないのです。このことから言えることは、国立大学であっても自らの発展のためには先ずはその大学の関係者の努力が不可欠だということです。ましてや今日のように国立大学法人化の時代にはこのことが言えるでしょう。

私自身は覚悟の上とはいえ、この運動に約1年余寝食を忘れて心血を注ぎましたので学業は半ば放棄状態のため単位取得は進まず、また若いときとはいえ相当に無理を重ねましたのでこの問題の一段落後、体の方々に異常が噴き出してきました。今から思うと自律神経のバランスを崩したのだと思います。実際問題としてこの統合運動の間に土木工学科で課せられていた応用力学の単位取得（必要な単位は必ず2年までに取得すること）による2年から3年に至る進級制限のハードルには引っかからなかったものの、2年の後半と3年に課せられていた単位の取得状況は壊滅的でした。このような状況では、既定の4年の期間に卒論を含めての卒業のための単位取得は絶望的な状況であったこと、他方ではこの運動の期間に多くの人に会い感じることも多く、この機会に自分自身を見つめ直してみたいと思いました。そこで、約1年位の間、西洋の古典を中心とした書物を読みました。実際は自律神経の乱れに伴うノイローゼ状態に近かったのが本当の姿だったと思います。

私の在学中は大学の先輩の活躍と言えば学校の前身である名古屋高等工業や名古屋工業専門学校出の方々でしたが、今は大学になってから

の人たちが日本の中堅及び大手企業などでの活躍ぶりを目にして心強く思っています。このほかにもこの日本を根っこで支えている企業や官庁など各方面の分野においてもキーパーソンとして重要な働きをしておられる方々も沢山おられることと思います。これもそれぞれの立場での自己努力があつたのこととは思いますが、ここにも名工大の地味な校風の中で育まれてきた伝統の強みと根性といったものを感じます。またキャンパス整備も進み本格的な建物が林立している姿は私どもの頃のことを想うと隔世の感があります。

さらに、私どもの頃にはなかった大学院についても博士課程も含めて設置され、いまや、8割近くの学部の学生が大学院に進学することです。当然のことながら、学術研究のレベルも我々の頃と比べて実質的にも相対的に大幅にアップしていると思います。

名古屋工業大学は、今後とも、時代のニーズに合わせてさらに発展をするためには多くの克服すべき課題を抱えてはいるとは思いますが、名実ともに日本を代表する本格的な大学としての体制を整えたと言える段階を迎えているのではないのでしょうか。今や、名工大からもノーベル賞ないしはノーベル賞級の業績者が現れても決しておかしくはない状況に至っているのではないのでしょうか。これとて、その多くは世間でもはやされるような派手さを喧伝するような取り組みではなく、むしろ、地道ではあるが執念を持った取り組みから生まれてきていることを今までの受賞者像から教えていてくれますし、私のささやかな人生経験からもこのことを強く感じます。

6. 卒業後に若干関わった第二キャンパス展開の問題

以上が学生としての私が御器所キャンパスの統合に関わった経緯と取り組みの内容ですが、その後、私の県庁での仕事が一段落した卒業25年後の昭和62年の頃に名古屋市の守山区の志段味地区に市の区画整理事業の一環としてヒュー

マンサイエンスパーク構想が具体化しつつあるのを知りました。そこで、私は学生時代に御器所キャンパスの統合計画に関わったこと及びまだ名工大には千種地区に運動場施設と寮施設用地として約40,000m²位残っているのを承知していたこと、そしてここには御器所キャンパスとは別の第二キャンパスを展開するには狭すぎることや御器所キャンパスとの間の公共交通の連絡網が貧弱（地下鉄の茶屋ヶ坂駅からも2km近くある）なことから大学のさらなる発展に備えて現在の千種地区からは距離的には遠くなるものの、名工大とはJR中央線（地下鉄並みの時間間隔で運行）で直行でき時間的にはそんなに遠くはなく、おそらくは等価交換方式をとっても現在の千種地区面積の3倍位はこの志段味地区に学校用地を確保できるのではないかと考えました（この候補地は高蔵寺駅から円弧を描いて2km位に位置する）。

幸いにと言うべきか、県庁と市役所とは隣合わせであり市役所には仕事を通して知り得た知人・友人もあり、たまたま、私は志段味地区事業を進める立場にある人にこのアイデアについての市の意向を打診してみました。その結果、市の担当の方はこのアイデアを助役レベルまで上げてのことですが、市としてはこのアイデアを前向きに受け止めるとのことでした。

そこで、私はかねてより同窓会などで当時の太田学長にはお目にかかっており、この方なら私のアイデアを提案してみる価値があるのではないかと考えてこの問題についての私なりの考察を加えたレポートを一人の卒業生として太田学長に提出しました。この結果、名古屋市と学校当局とは正式な話し合いに入られたようで双方で基本的な計画の枠組みとして千種地区用地を名古屋市に引き渡す代わりに志段味地区にしかるべく用地を名工大が取得することが合意され、このことが志段味のヒューマンサイエンスパーク構想展開の一環として新聞にも正式発表されたのです。

この合意発表に前後して太田先生から私にも「はがき」でしたが丁重な報告をいただきました

た。そして私は計画の成就を楽しみにしていたところ、いわゆる、バブルの崩壊の時期かと思いますがこの計画が頓挫してしまったのです。それは双方の地価に変動があり名古屋市と大学との基本的な合意の枠組みの実行に支障が出てきたのがその理由のようです。口の悪い市の関係者は名工大が逃げてしまったとの表現をしていました。

長年、行政を経験してきた私から言わせれば当時の名工大にはこの計画を実現するための熱意と知恵が足りなかったのではないかと思います。市の区画整理事業といえども一種の公企業的な事業であり、両地区の間に最初に想定したそれぞれの地価評価に変動あった場合に市としては何でもOKと言えないのは当然です。一方の千種地区は良好な住宅地であり本来は良い場所にある筈ですが当時新しく開通した地下鉄環状線の茶屋ヶ坂駅から歩いて2km近くあり住宅地としての地価評価は必ずしも高くないのです。このような場合には志段味地区の当初の確保面積を一部減らしてその部分は保留にするなどの工夫・知恵があったように思います。当然、市としては公企業的な処理をする必要に迫られますが、同時に相手は市なのです。私は大学が礼儀を尽くし・工夫をすれば方法があったように思えてなりません。それと時代の変化もあって志段味地区の開発用地も飛ぶような売れ行きではないのです。大学のさらなる発展の上から見て、千種地区のあの場所での寮施設と運動場施設としての活用は既に触れたように御器所キャンパスとの位置関係（交通のネットワーク面がネック）から広く社会経済的に見ても効率的ではないように思えます。

太田先生（学長）としては千種地区の有効活用（処分）と合わせて名工大の将来の発展のためにご尽力されただけにくれぐれにも残念です。このことに関連して付け加えておけば、名工大と東工大とはその底力が違うのかもしれませんが、東工大は当初の蔵前から大岡山キャンパスに拠点を移し、さらに第二キャンパスを長津田に求めています（この二つであの東京地

区にあって広大なキャンパスを構えています）。当今、この名古屋地区の有力私学は大学の立地場所を学生集めのために名古屋駅前地区や名城北地区といった確かに交通は至便なところですが、狭い場所でありこれではまるで予備校か専門学校かと思えるほどです。しっかりとした芯があり、この日本を背負って立つ学生を育てるためにはそれなりのキャンパス風景・雰囲気醸し出す環境が必要ではないでしょうか。

7. 終わりに

最後に、以上で名工大のキャンパスを巡る問題について私の体験を縷々述べてきましたが、このことを報告することが自らの手柄話に思えたりしたこと、もし報告するとしても70歳を過ぎてからとあって思いました。それが既に70歳を超え私は間もなく満72歳を迎えようとしています。それが今度はいざ文書でまとめるとなると、そのことが面倒に思えたりしていたのがこのところの心境でしたが、つい最近、私の尊敬する同窓の友人に学生時代に大学に対してこんな関与をしてきたと話したところ、是非、会報の「ごきそ」で報告したらとの話、勧めがありましたので一念発起して不十分ながらまとめてみました。このまとめをしていてつくづく感じたのは佐藤先生（学長）、城戸先生、橋本先生、太田先生（学長）への心からなる感謝です。これらの先生方はいずれも今は亡き故人です。

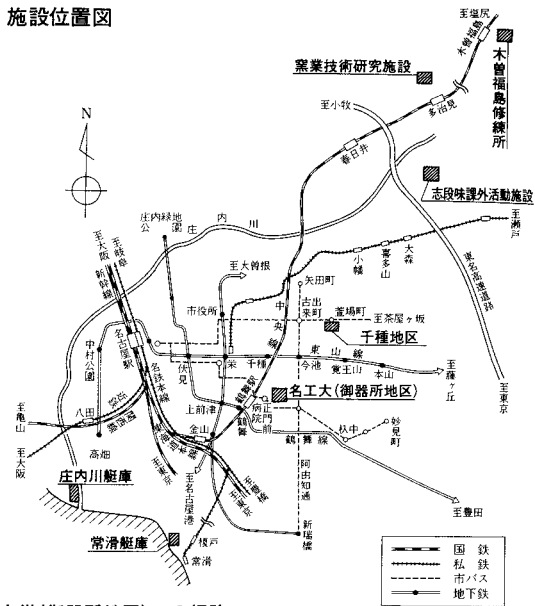
人生の中には無駄なことも失敗することも多々あるのですが、佐藤先生については私たちの取り組みをきちんと受けとめていただいて間違いなく御器所キャンパスへの統合を実現していただいたことです。城戸先生にあっては名工大のことをいろいろとご心配になり先生の立場で私どもに親身になって適切な助言をいただいたように思います。橋本先生には私どもの動きを見て何気なく動いていただき、ご尽力していただいたことです。太田先生には大学の同窓会の場で私は自ら進んで挨拶をしたことはあるものの、先生にとってはあまり知らない人間である私の提案・気持ちを真摯に受けとめ大学のさ

らなる発展のために尽くしていただきました。

最後に、名古屋工業大学 (Nagoya Institute of Technology) の今後のさらなる発展を祈るとともに、亡きこれらの先生方のご霊前に私の心からなる感謝を奉げます。

付記：本稿を書き上げてから若干の日時が経過しましたが、この間に、例えば、新半導体実用化への研究センターの設置を国の助成を受けて設置する動き (中日・2011/7/28) など工業大学としての着実な前進の姿に心強くしています。これに、愛知県岡崎市にある国立の自然科学研究機構の3研究所 (基礎生物・生理学・分子科学) と名工大との連携推進の協定締結という注目すべき動き (中日・2012/2/21) が加わっています。これらの動きを見て、日本の針路も定まった明治の後半期 (明治38年3月)、当時の国策上から東海地方での最初の国立高等工業として出発した歴史と伝統ある本校が今や教育と学術研究の両面から押しも押されぬ存在になっているのを感じるのです。

施設位置図



本学(御器所地区)への経路

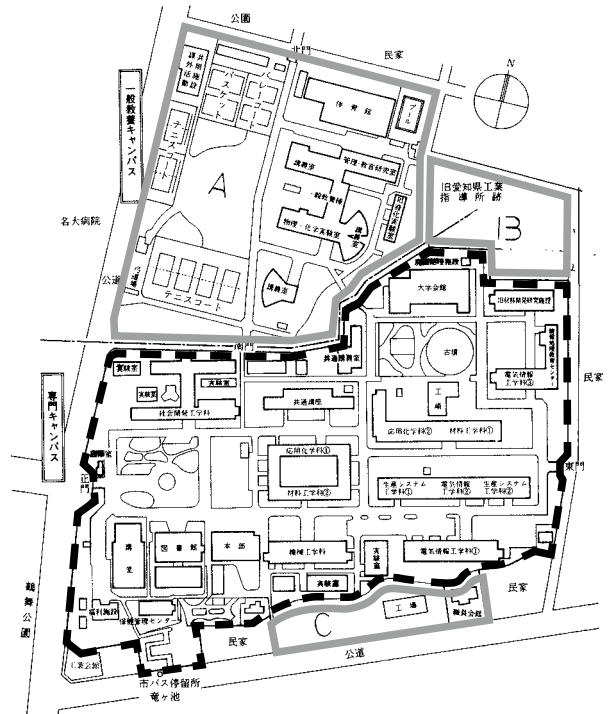
国鉄	名古屋駅	——(中央線)——	鶴舞駅下車東へ500m
地下鉄	名古屋駅	——伏見(東山線)のりかえ(鶴舞線)——	鶴舞駅下車4番出口東へ500m
市バス	名古屋駅前(バスターミナル)	——(⑨番妙見町行き)——	病院正門前下車東へ200m
地下鉄+バス	名古屋駅	——(地下鉄東山線)——	——(⑨番妙見町行き)——
		——(地下鉄)——	——(⑨番妙見町行き)——
		——(地下鉄)——	——(⑨番妙見町行き)——
		——(地下鉄)——	——(⑨番妙見町行き)——

建物配置図

(御器所地区)

昭和60年5月1日現在

1/2800



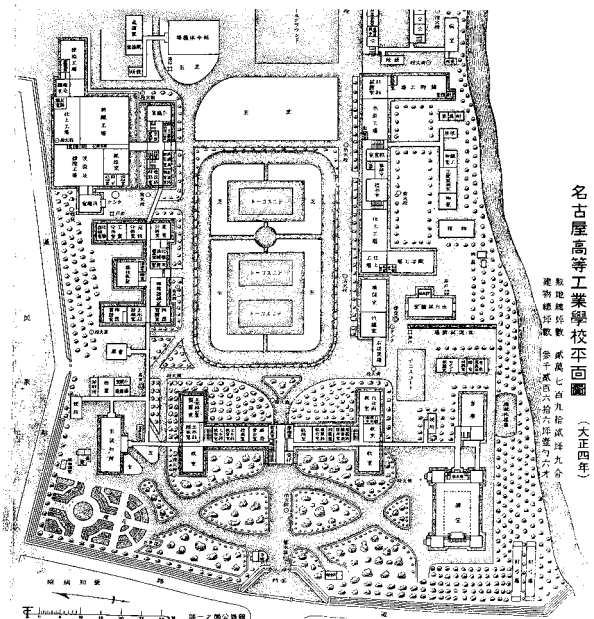
既存の御器所キャンパス (昭和33年当時) とその後の統合用地位置関係図

1. 点線での表示区内在昭和33年当時の既存キャンパス用地
 2. 「A」区内が鶴舞公園北用地 (昭和33年当時)
 3. 「B」区内が愛知県工業指導所用地 (昭和33年当時)
 4. 「C」区内が旧中部地建用地
- 上記の1.2.3.4.を合わせての用地面積=約138,000m² (なお、既存の御器所キャンパスの面積は不詳)、この他に名古屋市との間で上記の「A」に該当する鶴舞公園北用地とそれまでの千種キャンパス用地とを等価交換した残りの千種キャンパスの用地は約40,000m²程度あったと見られる (基本的には現在もあると見られる) (10.09.14記) [出典根拠]: 名古屋工業大学要覧 (創立80周年記念特集号・昭和60年) による。

名古屋工業大学要覧

創立80周年記念特集号

(昭和60年)



名古屋高等工業学校平面図 (大正四年)

ごきそ ホットライン

表彰者紹介

平成23年度叙位・叙勲受賞者は以下のとおりです。
5月26日の名古屋工業会の総会で、工業会からの表彰を行います。

「旭日双光章」 (建築設計監理業振興功勞)

渡辺 良彦



【学 歴】

昭和34年 3月 名古屋工業大学建築学科卒業

【職 歴】

昭和34年 4月 清水建設(株)建築部 入社
昭和36年 11月 清水建設(株)建築部 退社
昭和36年 12月 (株)渡辺工務店 入社
昭和37年 11月 (株)渡辺工務店 取締役
昭和52年 6月 (株)渡辺工務店 代表取締役

「瑞宝中綬章」 (教育研究功勞)

公平 珠躬



【職 歴】

昭和31年 4月 東京都公立学校 教員
昭和38年 8月 名古屋工業大学 講師
昭和39年 4月 名古屋工業大学 助教授
昭和52年 4月 名古屋工業大学 工学部教授
平成7年 3月 名古屋工業大学 定年退職
平成7年 4月 日本福祉大学 情報工学部教授
平成11年 3月 日本福祉大学 退職

「瑞宝中綬章」 (教育研究功勞)

山口 譽起



【学 歴】

昭和28年 3月 名古屋工業大学工学部機械工学科卒業
昭和34年 3月 東京大学大学院機械工学専攻
博士課程単位取得満期退学
昭和34年 10月 工学博士の学位取得(東京大学数物第63号)

【職 歴】

昭和34年 4月 名古屋大学工学部 講師
昭和36年 10月 名古屋大学工学部 助教授
昭和39年 8月 文部省在外研究員として
1年3ヶ月西ドイツ国へ出張
昭和51年 1月 名古屋工業大学工学部 教授
平成4年 4月 名古屋工業大学 副学長
平成6年 3月 名古屋工業大学 定年退官
平成6年 4月 名古屋工業大学 名誉教授
平成6年 4月 名城大学理工学部 教授
平成6年 4月 (財)豊田理化学研究所 理事(現在に至る)
平成15年 3月 名城大学 定年退職

※平成23年4月 公益財団法人豊田理化学研究所に移行

〔叙位叙勲受章者は名古屋工業会で表彰しますので、事務局まで連絡いただきますようお願いいたします〕



学生コーナー

社会人基礎力育成グランプリ2012決勝大会進出

名工大新聞部 広瀬 雄治（電気電子工学科3年）

2月27日、東京都千代田区大手町にある日経ビル日経ホールにて、社会人基礎力育成グランプリ2012の決勝大会が行なわれた。

本大会では、2006年より経済産業省が提唱する「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの力と12の能力要素で構成される「社会人基礎力」を、大学のゼミや授業、研究等を通していかに育成・成長させることができたのかを学生が発表し、企業での人材育成や教育機関の教育活動の参考とする場として活用される。また、社会人基礎力の概念の普及という役割も持っている。会場の座席の多くは協賛会社などの企業の人事・人材育成担当や経済産業省および各大学の就職担当、決勝進出大学の応援者などの関係者で占められていた。本大会は2009年より経産省より開催されており、昨年11月に行われた地方予選では全国88大学108チームが参加（昨年は100大学100チーム）した。その中の6地区から予選で選抜された8チームの内、中部地区を代表して本学の山下啓司教授（生命・物質）を指導教員とするチームの「工学系正課カリキュラムを通じた社会人基礎力の育成」が選出された。大会当日は、各大学の発表の前に、社会人基礎力の概要説明と「社会人基礎力人材育成協議会」からの報告が行なわれ、各大学25分ずつ発表と質疑応答を繰り返した。その後、企業の人事担当者や学生が「グローバル社会で問われる社会人基礎力」というテーマでトークセッションを行われた。本大会の内容は全体を通してUSTREAMにて全世界に配信されていたので、現在でも視聴が可能である。

本学の発表では、まず山下啓司教授による簡単な活動発表の概要が説明された。次に、柘植今日子さん（生命物質3年）、奥野信吾さん（生命・物質3年）、安井大観さん（電気電子3年）らによる学生発表が行なわれた。ここでは最初に、山下啓司教授が行なった概要説明を掘り下げて各段階の内容が紹介された。まず、「キャリアデザイン」においてグループワークと企業インタビューによって自己分析と業界研究を行ない、キャリアパスの設計を行なう。次に「インターンシップ」において先輩のいる会社で働くことによって、将来像の俯瞰と共働の実感を

し、足りない物の発見を行なう。最後に専門科目の「環境高分子化学」においてグループワークとフィールドワークを行う事で、環境とプラスチックについての知識を活用し、専門知識の深掘りを行なったという。

最終的な選考結果はトークセッションの後に行なわれ、大賞は福岡女学院大学、準大賞は静岡大学と岩手県立大学、会場特別賞に高知県立大学と、おしくも本学は入賞を逃してしまった。しかし、本大会の最後の表彰式において、協議会の座長である審査委員長の諏訪康雄氏は「多くの大学はPBL型で今回のグランプリに臨まれておりますが、そういう中で名古屋工業大学は通常の講義の中から、そこで身につけたスキルなどを他の講義にも波及させていく。さらにはその仲間の中に波及させていくと言った、大変困難ではありますが重要な課題に挑戦をされておりました。皆さんも自分たちだけではなくして、自分の周囲もやがて社会に出た際に、職場あるいは地域、皆さんは培った力を発揮していただきたいと思います」と、PBL型でなく授業の一環として行なわれた本学の発表について言及した。山下啓司教授は、社会人基礎力について、1年生と2年生に対して次のように語る。「まだ早いと思っているかもしれないが、3年のキャリアデザインをきっかけに社会人基礎力について考え始めて、マスターを卒業するまでには身に着けてほしい」

今回本学のチームの発表は、おしくも大賞には輝けなかったが、これからの社会と大学をつなぐ「社会人基礎力」普及のモデルとして会場を訪れた人々に刺激を与えられたであろう。



学内ニュース

情報基盤システムがリニューアル!

名工大新聞部 山川 智之 (電気電子工学科2年)

皆さんはこの春に情報基盤システムが新しくなったことをご存じだろうか。このことについて、情報基盤センター長であり名古屋工業大学附属図書館長でもある、松尾啓志教授(情報)にお話を伺った。

名古屋工業大学の教育用端末はレンタルであるため、5年に一度最新のものに更新する必要があるのだという。そして今春がその節目となり、システムの更新がなされることになった。最新のものに更新ということで、まずOSがWindows VistaからWindows 7になった。また、Microsoft Officeも2007から2010に。さらに処理速度も高速化された。この度の更新の際、教育端末の中に保存されているデータが削除されたり、教育用端末の入れ替えのために情報基盤システムの使用を停止されたりしたが、就活の関係などの理由でメールは使用可能なままにしておくなど学生のことを配慮しつつ新しい情報基盤システムになった。

ポータルサイトも新しくu-Portalというものになった。このu-Portalは拡張が可能で、自分の好きなように配置を変えたりすることが出来るそうだ。

その他にも、20号館のディスプレイが22インチに大きくなった。また、図書館の1階と2階にあるパソコンのうち、需要と供給の関係から2階のパソコンの台数を増やした。加えて今までは印刷をするときには一度学生証を抜いてログオフする必要があったが、印刷機がFelicaに対応するため、ログオンしながらでも印刷することが可能になった。

名古屋工業大学には無線LANルーターが約400台あり、学内であれば屋外でも使用可能である。ノートパソコンを持ち込んで利用するのはもちろん、スマートフォン等も利用することが出来る。情報基盤システムについて、松尾教授は「名工大の情報基盤システムは日本一。せっかくだからもっと使いこなしてほしい」と語る。入学時に情報基盤システムのマニュアルが配布されたと思うが、そのマニュアルには様々な機能や使い方が記載されている。是非この時期に読み直してみてもいいだろうか。

このリニューアルには約80人もの人関わっているそうだ。また、1年以上も前から準備をしてきたという。学生の目に見える変化は少ないが、裏ではとても作業が大変とのこと。現在は、システムの更新作業のほとんどの工程が終了し、新システムが本格的に稼働し始めている。



松尾教授

名古屋工業大学と自然科学研究機構岡崎三研究所が、「連携・協力の推進に関する基本協定書」を締結

名古屋工業大学は、自然科学研究機構岡崎三研究所との間で「連携・協力の推進に関する基本協定書」を締結した。2月21日、自然科学研究機構岡崎統合事務センターで行われた調印式では、高橋実名古屋工業大学長、岡田清孝基礎生物学研究所長、岡田泰伸生理学研究所長、大峯巖分子科学研究所長が一堂に会し、それぞれが協定書に署名した。

今回の協定は、お互いの研究能力や人材を活かし連携・協力を推進していくことで、科学技術の振興と人材育成を図り、新たな研究領域の開拓と活動領域の拡大を目指すことを目的としている。

調印式では、高橋学長から「世界的な三つの研究機関とさらに連携し、ネットワークを充実させたい」と挨拶があり、また岡崎三研究所長からは、それぞれ共同研究の推進、大学院教育への協力等について、協定への期待が述べられ、四者が握手を交わし決意を表明した。

四機関では、協定締結以前から、共同研究、研究設備の相互利用、大学連携研究設備ネットワーク（旧化学系研究設備有効活用ネットワーク）での連携など、非常に活発な連携活動が行われている。また、平成23年7月以降、四度にわたる合同講演会を開催し、いずれも活発な議論がなされ研究活動への相互理解を深めてきた。

本協定締結を機に、一層の連携・協力関係を推し進めることで異分野融合による新研究領域の開拓など、更なる研究交流の活発化が期待される。（事務局）



左から大峯巖分子科学研究所長・高橋実学長・岡田泰伸生理学研究所長・岡田清孝基礎生物学研究所長

附属図書館 FeliCaを利用した学外者向け新サービスを開始

名古屋工業大学附属図書館では、平成24年度から、FeliCaを利用した新たな学外者向けのサービスを開始した。FeliCaとは非接触型ICカードのための通信技術で、現在、おサイフケータイや、電子マネーカード、乗車カードなど一般に広く利用されている。図書館では、利用者が持っているこれらのFeliCaのIDm（製造番号）をキーとして利用者登録を行い、入館や図書貸出の際に利用するもので、登録後は利用者自身の携帯電話やカードなどを使って簡単にサービスを受けることが可能となる。

サービス開始日に利用者登録を行った利用者からは、「自分の持っているカードが図書館カードとして利用できるのは、非常に先進的で開かれたサービスだと思う。大学図書館が身近なものに感じられ、ありがたい。」と感謝の声もきくことができた。（事務局）



使用できるFeliCaの一例



端末での操作

若手研究者海外派遣プログラム成果報告会を実施

名古屋工業大学では、12月9日に「セラミックスを基軸とするものづくり研究拠点形成に向けた若手研究者育成プログラム（拡大ITP）」成果報告会を開催した。同プログラムは日本学術振興会「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム—若手研究者大航海プログラム—」事業の支援を受け、若手研究者を対象に、海外の研究機関等において研究を行う機会を組織的に提供し、国際的視野な富む有能な研究者を養成することを目的としている。同大学では、主にセラミックス科学研究教育院及び情報系の研究者及び学生を組織的に学術協定校、並びにその他の大学・研究機関へ50名（内訳：助教・ポスドク等15名、学生（学部生を含む）35名）を派遣。派遣先は主に欧州・北米の8カ国、19の研究機関に及ぶ。今回実施した報告会では助教4名、博士後期課程学生1名、博士前期課程学生2名、学部学生1名の研究成果及び体験談を発表した。発表後には発表者と来場者との活発な意見交換が行われ実りある報告会となった。なお、同事業は平成25年まで継続予定である。（事務局）



高橋学長、本事業関連教員及び発表者

名古屋工業大学「大学会館」開所式

名古屋工業大学では、平成24年4月5日「大学会館」の開所式を行った。

開所式には、高橋学長はじめ理事、副学長、教職員、学生を代表して工大祭実行委員長が参加した。学長からは「新たな学生のための施設である」というあいさつがあり、続いて中村副学長から、大学会館完成に至るまでの経過報告があった。

つづいて、高橋学長、木下理事、鶴飼副学長、中村副学長、工大祭実行委員長鈴木さん（工学部生命・物質工学科3年）によるテープカットが行われた。

開所式後、大学会館2階ホールに設置した陶壁画の披露が行われ、陶壁画のデザインのリーダーであるNDP（NIT DESIGN PROJECT）相川さん（大学院工学研究科社会工学専攻1年）から、陶壁画のコンセプトである「巢」「展」について説明があった。「巢」とは、卒業生にとっての古巣として、また在校生にとっての巣として、鷺の巣をモチーフに表現され、また「展」は本学から世界へ羽ばたく展望の場所として、南側の窓へ開く流れを背面の枝を模したタイル壁によって表現されており、参加者からは「素晴らしい作品である」と感想がのべられた。

大学会館は、開所式の直後から多くの学生でにぎわい、今後も様々な目的で利用される「学生のための施設」として十分な役割を果たすことであろう。

（事務局）



陶壁画の説明をするNDP（NIT DESIGN PROJECT）相川さん

情報 ネットワーク

名古屋工業会岐阜支部 平成23年度研修旅行報告

『名建築の老舗料亭（料亭 洲さき）で味わう懐石料理』

名古屋工業会岐阜支部は、2期4ヵ年ごとに幹事学科が交代する体制をとっており、平成23年度から4ヵ年は建築学科が担当することになりました。毎年秋季に実施する研修旅行も建築学科が担当することならば、建築に関連する事業計画にしようということで支部長以下協議の結果、「名建築と美味料理」をテーマに計画することになりました。第1回目の平成23年度は、岐阜県高山市を視察先に選定し、高山市にある「料亭洲さき」で昼食を摂り、近接する国指定重要伝統的建造物群保存地区である「高山市三町伝統的建造物群保存地区」を建築ガイド付きで廻る散策コースにしました。

「料亭洲さき」は、雑誌「和楽」や「婦人画法」等に掲載され、皇族、政治家等の著名人が訪問し、作家司馬遼太郎も執筆している著名な料亭で、保管されている棟札によると寛政6年（1794年）に建築されており、創業260年になる老舗の料亭です。高山市神明町4丁目14番地にあり、前面道路を西に行くと宮川にかかる中橋で、東隣は旧高山市庁舎（現高山市政記念館）となっています。建物外観は、二階建て平入り切妻屋根で、外壁は大津壁仕上げ、障子窓に出格子、切子千本格子（高山格子ともいう。）などになっています。玄関を入ると、土間（ドージ）、上り間及び台所（オエ）には、梁と桁が表しとなった吹抜けがあります。客間は、一階が個室中心の数寄屋風の座敷で、「川の間」「松の間」「雪の間」と室名に由来した内装仕上げとなっており、二階は「一番の間」から「六番の間」まであり、書院造り風の座敷となっています。

当日は、午前8時にJR多治見駅前を出発、午前9時にJR岐阜駅前を經由し、一路高山市に向かいました。参加者は名古屋工業会会員と家族の参加で25名、10月1日という日程のせいか思いのほか小人数でした。午前11時30分に高山市に到着し、予定通り「料亭洲さき」に入りました。昼食は老舗料亭の懐石料理ということでしたが、季節の素材（きのこや野菜など）や地元の素材（鮎や赤カブなど）を丁寧に調理したものでした。また女将や仲居さんの「もてなし」には充分なるものがあり、参加者は昼食をしながら懇親を深めることができました。その上当該建造物について建築学科OBより詳細な説明があり、また掛け軸（当日は北原白秋自筆の書画）や墨書による扁額などの説明を仲居さんより受けることもできました。その後「料亭洲さき」女将と仲居さんの見送りを受けた後、「高山市三町伝統的建造物群保存地区」を散策しました。高山市の伝統的な町家造りで元商家の「平田記念館」、日本酒 久寿玉で有名な「平瀬酒造店」を見学し、その間にも上三之町や上二之町の町並みの中を建築ガイド付で周遊しました。午後3時には高山市を出発し、無事帰路につくことができました。

来年度以降も建築学科のテーマである「名建築と美味料理」を継続する予定で、2年目は「京都市」、3年目は「金沢市」、4年目は「奈良市」を計画しております。岐阜支部会員の皆様や家族の方の参加を歓迎しますので、今後とも是非ご参加ください。

記：田中 清之（A54）



料亭 洲さきでの会食風景



料亭 洲さきでの集合写真

平成23年度名古屋支部の“工場見学研修会”開催報告

平成24年3月9日（金）に、バス1台満席の参加者41名で開催しました。午前は名古屋港金城ふ頭にある「リニア・鉄道館」を見学しました。人気の鉄道車両の展示場とあって、平日の午前でも大勢の入場者で賑わっていました。1階の車両展示では懐かしい蒸気機関車を始め、形式の異なる気動車や電車、0系・100系・300系の過去に営業運転された歴代の新幹線に加え、ドクターイエロー、超伝導リニア試験車両などが多数並べられています。実物車両をいろいろな角度から見て、ふれて、乗って、その迫力が実感でき、鉄道ファンならずとも興奮させられます。展示コーナーでは、鉄道のしくみや歴史を体験しながら楽しく理解できるよう工夫されています。新幹線および在来線のシミュレーター、鉄道ジオラマ、超伝導リニア展示室など魅力にあふれ、楽しい見学となりました。

昼食後は、愛知県が建設し昨年末に完成させて、今年2月中旬に竣工式が行われました“知の拠点”の「あいち産業科学技術総合センター」

を訪問しました。場所は、2005年に開催された愛知万博の跡地の豊田市八草町にあり、センターの所長に就任されたD50中野達夫氏のお世話で施設見学を行ないました。すでに愛知県の重点研究プロジェクトとして3研究テーマが決まっています、その一つが名工大副学長のM50中村隆教授をリーダーとする「低環境負荷型次世代ナノ・マイクロ加工技術の開発プロジェクト」で、中村先生より説明を受けました。新施設の見学では、作りつつある「中部シンクロトン光利用施設（仮称）」を2階より窓越しに見ながら詳しい説明がありました。最先端技術の紹介を受けて技術立国日本の将来に強い期待をいただきました。

見学研修の終了後は恒例の浩養園で参加者一同、焼肉パーティで懇親を深めました。参加いただきました皆様にはこの紙上を借りましてお礼申し上げます。

記：緑 静男（D42）、犬塚正憲（D48）



写真1. リニア・鉄道館



写真2. あいち産業科学技術総合センター

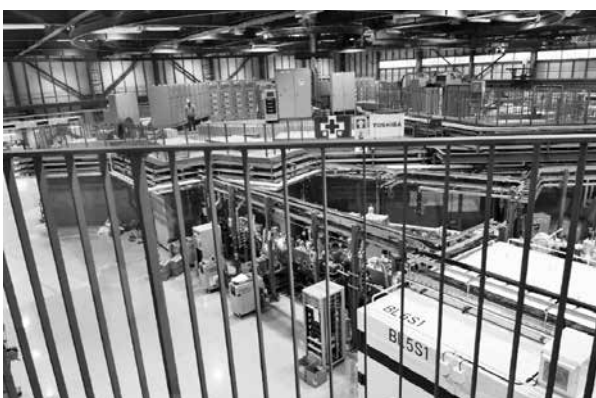


写真3. 中部シンクロトン光利用施設（仮称）



写真4. 懇親会（浩養園にて）

緑会「平成23年度キャリアサポート 交流会・懇談会」の開催報告

平成24年3月2日（金）、緑会主催の「キャリアサポート交流会・懇談会」を講堂会議室において開催しました。企業より52社、90余名（卒業生50名超）の参加を得て、学生260名、教員39名、幹事10名の出席でした。開催に先立って参加企業への挨拶（写真1）、就職予定の学生への説明（写真2）を行いました。その後「キャリアサポート交流会」と名づけた企業説明会（1社につき幅900mm×高さ1800mmのボードにポスターを貼って行う交流会形式）を2時間半かけて実施し（写真3,4）、熱気溢れる雰囲気の中で交流がなされ、大変盛況でした。名古屋工業会からは二杖常務理事様がお越しになられ、会場内を見学していただきました。交流会後は1時間、内定者・企業関係者・教員の「懇談会」を行いました。

緑会では、毎年3月に「講演会」およびパーティ形式の「懇談会」を行ってきましたが、平成20年からは「キャリアサポート交流会」を併せて開催してきました。5回目の今年は、社会情勢の変化や参加者の動向を考慮し、就職希望の学生に対して有効な情報を提供する「キャリアサポート交流会」に的を絞って大学内で開催することにしました。これにより、3月の忙しい時期に担当される先生方の負担も軽減されます。今回の交流会終了後のアンケート集計結果では、参加企業、学生とも“満足した”との回



会場の様子

答が多くありました。学生にとっては、“先輩による生の声”をたくさん聞くことができ、いろいろ参考になったものと思われます。今後もより良いやり方を模索しながら、続けていきたいと考えています。

記：緑 静男（D42）

第88回名工大ごきそ会報告

第88回名工大ごきそ会は、平成23年12月8日（木）に19名のご参加をえて名門三好CC東コースで開催致しました。当日は、曇りのち雨の天気となり、後半は寒さも加わり久しぶりの雨の中でのプレーとなりました。その中で、一段とゴルフの安定感が増してきました泉地正章氏（W44）がグロス82ネット78の好スコアで優勝されました。そして前回3位でありました平岡雄偉氏（A39）がネット81で2位となられ、3位は、ネット83で水谷尚美氏（D42）が獲得されました。又栄えあるBBは前回と同様森川民雄氏（W45）が獲得されました。

プレー後、懇親会を開催し和やかな中、表彰式を行いました。今後会員の増員が必須であり改めて皆様方の協力を得て会員の増員をめざしていきたいと思えます。次回は、来年3月28日（AM9：00スタート）にて東名古屋CC西コースで開催を約し、閉会いたしました。

記：柴田 作（A42）



第89回名工大ごきそ会報告

第89回名工大ごきそ会は、平成24年3月28日（水）に、会員16名の参加をえて、名門東名古屋CC西コースで開催致しました。桜の開花にはまだ早く会えなかったのですが、穏やかな春の日差しを浴びながらのゴルフ日和となりました。しかし、会員の方々は、ゴルフ日和イコールスコアアップとはいかず、各ホールで疾駆八苦されている姿がみられました。優勝は、グロス90、ネット81で久しぶりに國島尤様（E29）が獲得されました。2位はベテランの寺西鋼三様（K33）がグロス93、ネット84でなられ、3位は、グロス86、ネット84で梶原俊彦様（B45）がベストグロス賞と一緒に獲得されました。そしてBB賞は、安田秀樹様（D28）が獲得されました。

競技終了後懇親会の中、表彰式をおこない改めて賞をいただいた方々の晴れやかなお顔を拝見しながら優勝されました國島様のスピーチをいただき、今回で退会されます安田様のスピーチもいただきながら和やかな時間を過ごす事が出来ました。今回、会員の動静がありまして、会の最長老である桜井尚様（E18）が残念でございまして1月に亡くなりました。又安田秀樹様（E28）、田坂弘次郎様（E24）が、一身上の都合により今回で退会されまして現在の会員数が、休会者を含めて24名に減少しました。以前より会員増強については、会員の皆様をお願いをして増強をしてみましたが、今後もなお一層のご協力をお願いいたく増員を図って行きたいと思っております。次回は、節目の第90回であり名門愛知カントリーで開催を約して解散いたしました。

記：柴田 作（A42）



名工会東京支部 第209回ゴルフ大会報告書

第209回大会は、11月28日（月）に神奈川県大厚木カンツリークラブ桜コースで開催されました。時々日がさす曇天の中で参加者全員が気持ち良く、無事にプレイを終えることができました。

参加人数は20名、終了後に恒例の懇親パーティーがあり、和やかな雰囲気の中で入賞者の表彰式を行いました。

優勝は最高齢の小関健二さん（M18）で、アウト48、イン46、ネット64という近来にない本人も驚くほどの8アンダーという好成績でした。

準優勝はアウト45、イン50、ネット69の安藤文夫さん（E31）、どちらもシニアで若手の奮起が望まれます。3位は野澤滋為さん（M36）が獲得されました。

満75歳以上のシニアは9名も参加され、9ホールのベストネットに与えられるシニア賞は、優勝者と準優勝者は資格がないため大波賞も受賞された中村和男さん（E34）がアウトネット33.5で、運よく繰り上げ受賞されました。

また田北元良さん（C34）が喜寿を迎えられ、規定により本間吉夫様から記念品が授与されました。

小関健二さん（M18）からの卒壽賞（グロス90）は、残念ながら今回も該当者がなく、次回以降に持ち越しとなりました。

次回は、2012年3月26日（月）に神奈川県本厚木ゴルフクラブで行います。

実行委員 竹林義之、山川元伸



平成23年度名古屋工業大学基金寄附者 (平成23年12月～24年3月)

※数字は卒業年度 (○数字は平成)

名古屋工業大学基金への寄付は、母校の発展に大きく貢献しますので、同窓会や同期会等の機会にもご協力をお願いします。

募金に関する問い合わせは、名古屋工業大学基金ホームページ

<http://www.nitech.ac.jp/kikin/index.html> または電話052-735-5004 犬飼まで

【個人】 青柳 昌宏 Es37 泉館 昭則 E25(2回) 伊藤 和紀 K37 井野 三徳 A28
牛込 進 Y33 江端 昭夫 A28 加藤 勝英 E39 金澤 秀喜 E47
杉浦 潔彦 W34 杉戸 大作 C32 杉野 正博 Y42 杉村 修一 A35
杉山 宏 A28 鈴木 倭 E34 寺尾 英樹 D38 長島 徹 W40
中村 光一 E41 中村 敬 Y55 西河原賢二 F49 西田 修造 F51
服部 光夫 A院56 服部茂登夫 M12 松原 敏朗 C③ 村上 浩 院物質63
森川 豊 A37 安田 善守 C36 吉村 洋典 E42

【団体】 K46会有志 株式会社TYK 計測工学科45年入学者一同

【このほかに掲載を希望しない方14名】

名古屋工業会の本部関係会議情報 (平成24年3月)

○役員推薦委員会 3月15日(木)18:05～

議題1 理事、監事、評議員、参事、参与候補者の選任について

候補者を提示し、承認された。また、任期満了による退任役員も紹介された。



名古屋工業大学公開講座のお知らせ

6月2日(土)の講師・岡島博司氏は1991年(平成3年)物質工学専攻金属材料ご出身の本学OBです。(社)名古屋工業会では、産業界で活躍中、または活躍された会員の貴重な経験を若い後輩の諸君に伝え、それぞれのキャリア形成の一助とするため、OB講演会・企業トップセミナーの開催、実務型教員の派遣など、大学・学生支援事業を展開しています。平成24年の新たな取り組みとして、一般社会人を対象とした「全学的に実施する公開講座」(H24.5.26(土)、6.2(土))にも、講師を派遣することとしました。今回の試みは産業界で活躍中の会員の視野・識見を高める自主研鑽にも資するよう、さらには母校との深いつながりを持つ機会を提供する目的もありますので、会員各位の積極的な参加を期待して、以下にご案内します。

- 【講座名】 さよならエネルギー多消費型社会—名工大の挑戦— 【主催】 工学教育総合センター
 【日程】 平成24年5月26日(土) 13:00～15:10、平成24年6月2日(土) 13:00～15:30
 【担当講師】 竹下隆晴、藤正督、曾我哲夫、岡島博司 【対象者】 一般市民【募集人数】 100名【講習料】 無料
 【会場】 名古屋工業大学(名古屋市昭和区御器所町) 2号館1階0211講義室
 【申込方法】 ウェブサイト・電子メール・FAX・郵送・窓口のいずれかで講座の5日前までにお申込みください。
 詳しくは<http://www.nitech.ac.jp/course/kouza/application.html>をご参照ください。
 【問い合わせ先】 名古屋工業大学学務チーム学部担当
 e-mail:gakumu-tan@adm.nitech.ac.jp、TEL:(052)735-5066(ダイヤルイン)、FAX:(052)735-5072

【概要】 2011年3月11日におきた東日本大震災は、地震、津波に加えて、原子力発電所の事故によって大きな被害をもたらしました。これを契機として、あらためて、私たちは、エネルギー多消費型のライフスタイルを見直すことが求められています。戦後日本は、国際競争の中で、高度経済成長を遂げ、GDP(国民総生産)を上げることへと邁進する中で、生活は便利になり、物質的にも豊かになっていきました。エアコンやテレビ等の一世帯当たりの保有台数も増加するとともに、パソコン、温水洗浄便座、DVDといった新しい機器の登場と普及によって、エネルギー消費もますます増加しています。さらに生活スタイルの深夜化、核家族化の進行、晩婚化・未婚化等に伴う単身世帯の増加が、エネルギー消費の増加に一層の拍車をかけているといえます。このような経済優先社会の中で、安全への配慮、省エネへの取り組み、真の豊かさの確認、大量生産大量消費(大量浪費)のあり方への反省といったものは、あまり重視されてこなかったといえます。今回の大震災と原発事故をふまえ、資源・エネルギーの消費量を減らし、環境と調和した経済活動やライフスタイルをめざしていくことが求められています。そのためには、私たちが自分たちの暮らしを見直し、社会のあり方を考えることも重要となってきます。工学系大学である本学においても、環境調和、省エネルギー、再生可能エネルギー等とかわる技術の研究が進んでいます。本講座では、皆さんと一緒に、エネルギー多消費型社会を見直す技術のあり方について考えていきます。

プログラム

平成24年5月26日(土)

時間	講座名(講師)	要旨
13:00～14:00	「省エネルギーで活躍する パワーエレクトロニクス技術」 竹下 隆晴 (電気電子工学科 教授)	皆さんが普段使用している家電製品や今後普及が進む電気自動車、さらには産業用機械に至るまで、さまざまな機械は、電気で動いています。各機械の中で電気エネルギーを有効利用するために、交流を直流に変換したりする電力変換技術がパワーエレクトロニクス技術です。本講座では、省エネルギーを実現しているパワーエレクトロニクス技術と今後の新しい技術についてわかりやすく説明します。
14:10～15:10	「空気で作る省エネ材料… 貼るだけで良いんです!」 藤 正督 (セラミックス基盤工学研究センター 教授)	空気は人間が生きていくために大切ですが、普段の生活の中で意識することはあまり有りません。このように目立たない空気ですが、実は安全で安価な機能性素材なのです。例えば、冬の寒空に重ね着をすると暖かいのは、洋服と洋服の間の空気が、体から熱が奪われないように守ってくれているのです。本講演では、我々の研究グループが開発した、空気を積極的に用いた省エネルギー材料およびその周辺技術についてお話しする予定です。

平成24年6月2日(土)

時間	講座名(講師)	要旨
13:00～14:00	「太陽光発電の大量普及に向けて」 曾我 哲夫 (未来材料創成工学専攻 教授)	東日本大震災による原子力発電所の事故以来、太陽電池を用いた太陽光発電は将来のエネルギー源として益々期待が高まっています。国の電力買い取り制度もあって近年太陽光発電の導入が進んでいますが、今後はさらなる普及が期待されています。太陽光発電の鍵は発電コストの低減であり、従来のシリコン系太陽電池の開発に加えて新しいタイプの太陽電池の研究開発が行われています。本講座では太陽光発電の現状について述べた後、講師の研究室で行われている研究成果を交えながら太陽電池開発の一端を紹介いたします。
14:10～15:10	「次世代車普及の課題と トヨタの取り組みについて」 岡島 博司 (トヨタ自動車株式会社技術統括部 主査)	トヨタで次世代車と呼んでいるのは、PHV、EV、FCVの3種類です。他社も含めて現在各社が普及に向けて注力しているのはEVですが、EVの普及に向けての努力は、1970年代および1990年代に過去二度ありました。しかし、いづれも成功とはいえませんでした。現在、第三次EVブームとも呼ばれる状況がありますが、当時抱えていたEVの技術的な課題が解消されたわけではありません。それらの課題克服に向けての現在のトヨタの取り組みを紹介いたします。例えば、商品としてはEVの持つ航続距離についての不安を解消したクルマとしてPHVを普及の柱として開発を推進しています。一方で、スマートグリッドなど社会システムと連携した新たなEVの価値創造による市場の創出といった取り組みです。
15:20～15:30	まとめ(修了証配布など)	

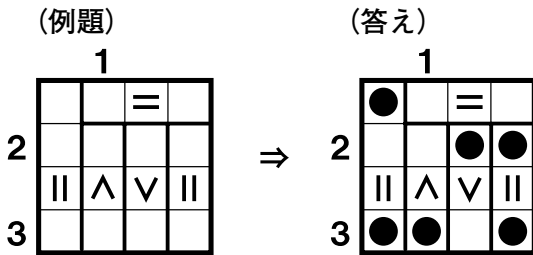
他の公開講座についてもホームページに掲載しています。

【URL】 <http://www.nitech.ac.jp/course/index.html> (名古屋工業大学公式ホームページ→生涯学習)

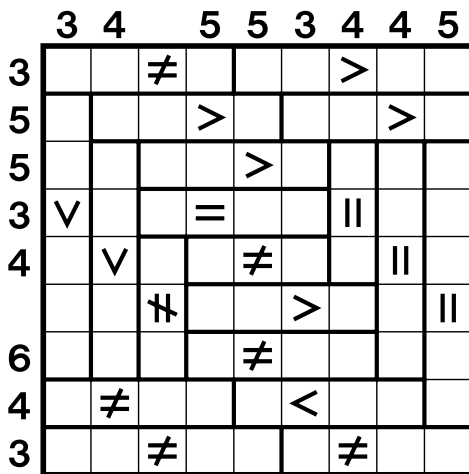
ごきそでパズル

ストーンズ Stones

いくつかの空きマスに●を入れてください。
 外側に数字の書かれている列にはその数だけ●が入ります。
 <、>、=などの記号は、そのブロックに入る●の個数の大小関係を表します。



問題



解答は次号に掲載します。

パズル：稲葉直貴 (EJ)⑬ 作

(前回の答え)

唐突で申し訳ない。今私は【モナコ】にいる。
 普段は至って【インド】ア派の私だが、パズル漬けの日々に疲【レソト】の空気を吸うためにしばらく休暇を【トルコ】にした。

泊まっているのは、知人か【ラオス】すめされた、朝ご【ハンガリー】ズナブルな価格で食べられるホテルだ。部屋の広さはちゅ【ウクライナ】がらも、家具の【ハイチ】が工夫されており、広く感じる。我が家よりも立【パナマ】取りだ。土か【ベナン】かも味があって良い。ここらでは最も歴史の古【イラン】ドマーク的存在らしい。【サモア】りなん。

今日は午後から市内を貸し【キリバス】で回る。すごい渋【タイ】だ。どの車もギリ【ギリシャ】間距離を取っている。これ【ジャマイカ】ーがあっても【スイス】イとは進めない。

この地区は治安が悪く、荷物をかっ【パラオ】うと狙っている輩がいる。女性なら【バチカン】にも注意だ。と言ってるそばから財布がない!まさか【スリランカ】んを超えて逃げ去る男の影が見える。どこの【ドイツ】だ。追いかけるが見失う。【コンゴ】は気をつけよう。

や【ケニア】ばらが痛むと思ったら、さっき転んだときにどう【モロッコ】つを打ったらしい。ちょっと頭痛もする。これはもっ【パラグアイ】が悪いときだ。

空は夕焼け色に【ソマリア】たりはもう薄暗い。霧も出てきて視界【ガボン】やりしている。

ホテル近くのレストランで夕食。テーブルには【チリ】ソースやワインビネ【ガーナ】どが所狭しと置かれている。せっかくの料理が口に合わず、付け合わせのさ【カナダ】け食べる。

食後は現地で【シリア】った友人【ラトビア】ホールへ。ピアノ演奏のチャールス【トンガ】流れている。すこ【ブルネイ】ろが良い。

そろ【ソロモン】限が迫るので、ホテルに戻ろう。寝るまでは日記を書【イタリア】すの予定を立てたりして過ごす。日常を離れると、何気ない生活が寧【ロシア】わせだったと気づく。

いよいよ帰国。お土産は迷ったけ【ドミニカ】ーにした。ではまた、つ【ギニア】う日まで、サン【キューバ】イバイ。

編集後記

皆様のおかげをもちまして、2年間の編集委員長を、無事勤めさせていただき、誠にありがとうございます。いたらぬ点が多々あり、皆様にはご迷惑をおかけしたことをこの場をお借り、お詫びいたします。7・8号からは、編集員委員会も一新し、新たな体制で「ごきそ」の紙面も一新

するとお聞きしました。今までにもまして、皆様のご協力をお願いいたします。「ごきそ」が同窓生の情報交換・親睦の場として活用されることを祈念いたしております。

(W61 樋口真弘)

企画から製本まで承ります。

企画・デザインから製本まで
トータルサポートでお値打ち!!

デザイン

名刺・ハガキ・封筒・チラシ・カタログ・パンフレット・ポスター 定期刊行物 etc.
タイプ・電子相紙時代から築き上げられたノウハウはDTPにおいて、特に不得意とされる版組みの書籍・表組みの買物も得意分野です。

印刷

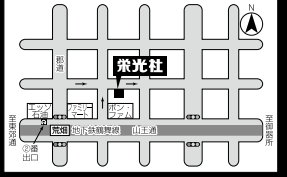
カラー印刷・2色刷り・1色刷り・特色刷り・品質 部数・ご予算に応じて提供いたします。
Macintoshのみならず、ワード・太郎等の通常オプセット印刷に適さないWindowsデータの出力ノウハウもありますのでご相談ください。

製本

自史・体験記・顕彰・俳句・小説・エッセイ・伝記・絵本等、自分の本を作りたいとお考えの方。
各種マニュアル・広報・配布文書・名簿・クラブ・サークル誌・宣伝物等、製本がお通りの学生・法人の方、少ロットよりお手伝いします。

総合印刷の 有限会社 栄光社

〒466-0014 名古屋市昭和区東細町一丁目42番地
TEL.(052)741-7701
FAX.(052)741-7703
URL <http://www2.oon.ne.jp/eik/>
E-mail eikou@theia.oon.ne.jp



(株)ブライダルは 名古屋工業大学会員の皆様の 「結婚」を応援します。

34年の実績
(一橋大コースetc)



左のQRコードにて携帯サイトに簡単にアクセスできます。
(一部対応しない機種がございます。)

名古屋工業大コース

これをご覧になったとおっしゃってくだされば

登録料 **50% OFF**

ブライダルコース ¥220,500▶¥204,750 etc.

エクセレントコース ¥378,000▶¥362,250 etc.

価格は登録料・会員サポート費・月会費(12回分)の税込総額です。

- 成婚率は業界トップクラス。
- 入会審査有り。
- 都庁・官公庁・有名大学などでメディア展開。
- お客様満足度NO.1のお世話を目指し少子化問題にも貢献。

株式会社 **ブライダル** お問い合わせ (月曜定休) ☎0120-415-412
<http://www.bridal-vip.co.jp>
名古屋本社 〒460-0008 名古屋市中区栄3-7-13 コスモ栄ビル9F
Network 東京・横浜・湘南・浜松・豊橋・名古屋・岐阜・大阪

デザイン 編集 印刷

ならアオイ・システムに!

- お望みの制作物を予算に応じてデザイン・編集・印刷までトータルにお受けします。
- コンサート等、予約管理システムによる座席の管理やチケット発券も承ります。是非一度ご相談を!!



株式会社 アオイ・システム

〒460-0022 名古屋市中区金山 5-5-20 日興ビル 4F
TEL **052-881-1151** FAX 052-884-8522
E-mail takasu@aoisys.co.jp

建設 不動産コンサルティング 調査 設計 企画



株式会社 前田組

代表取締役 前田 靖

〒466-0031
名古屋市昭和区紅梅町3-3 円昭ビル2F TEL052-852-2225
<http://www.maeda-gumi.com>

株式会社 円昭

代表取締役 前田由紀夫



〒466-0031
名古屋市昭和区紅梅町3-3 円昭ビル2F TEL052-841-2701
<http://www.enshow.com>

広報委員会

委員長 樋口 真弘 (W61)
幹事 山本 勝宏 (ZW⑥)

秀島 栄三 山口 啓 (C49)
北川 啓介 (A⑧) 安楽 崇宏 (M⑨)
小坂 卓 (EJ⑥) 廣瀬 光利 (E50)
朝倉 睦美 (W54) 野中 久義 (D⑨)
本多 沢雄 (ZY⑥) 道家 清正 (Y30)
平野 春好 (K50) 米谷 昭彦 (F60)
杉江 紘 (F院44) 横山 淳一 (Fb⑥)
三田 晴伸

特許業務法人 英知国際特許事務所

EICHI Patent & Trademark Corp.

所長 弁理士 岩崎 孝治

—— 知財の総合コンサルタント ——

東京本部 〒112-0011 東京都文京区千石 4-45-13
TEL:03-3946-0531(代) FAX:03-3946-4340

神奈川支部 〒224-0006 横浜市都筑区荏田東 1-23-2
TEL:045-532-3827 FAX:045-532-3828

浜松支部 〒430-0806 静岡県浜松市中区木戸町 5-11
TEL:053-461-5662 FAX:053-460-6027

山形支部 〒994-0026 山形県天童市東本町 1-2-20
TEL:023-651-6102 FAX:023-651-6102

<http://www.eichi-patent.jp>

会誌「ごきそ」のバックナンバーは、名古屋工業会のホームページ
<http://www.nagoya-kogyokai.jp/>でご覧いただけます。